

中国横断自動車道尾道松江線建設 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(18)

片野中山第9～12号古墳
右谷遺跡

2012

例 言

- 1 本書は平成19（2007）年度に調査を実施した中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う片野中山第9～12号古墳・右谷遺跡（三次市吉舎町敷地所在）の発掘調査報告である。
- 2 発掘調査及び整理作業・報告書作成は、国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所との委託契約により財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が実施した。
- 3 発掘調査は辻 満久が担当し、大成エンジニアリング株式会社（東京都府中市）が支援業務を行った。大成エンジニアリング株式会社の調査員は渡辺宏司、柴田 剛、大川康裕である。
- 4 出土遺物の整理・復元は辻、賃金職員の有原ひろみが、実測・写真撮影・図面の整理は辻が中心となって行った。
- 5 本書は辻が執筆・編集した。
- 6 本書で使用した遺構の表示記号は以下のとおりである。
SB：竪穴住居跡，SK：墓坑・土坑，SX：性格不明の遺構，P：柱穴
- 7 図版の遺物番号と挿図の遺物番号は同一である。
- 8 本書に使用した北方位は平面座標系第Ⅲ座標系北である。
- 9 第2図は国土交通省国土地理院発行の1：25000地形図（三良坂・吉舎）を使用した。

目 次

1	はじめに	(1)
2	位置と環境	(5)
3	調査の概要	(9)
4	調査の遺跡	(11)
	(1) 片野中山第9号古墳	(11)
	(2) 片野中山第10号古墳	(18)
	(3) 片野中山第11号古墳	(22)
	(4) 片野中山第12号古墳	(25)
	(6) 右谷遺跡	(31)
5	ま と め	(40)
	(1) 片野中山第9～12号古墳	(40)
	(2) 右谷遺跡	(42)

插图目次

第1图	中国横断自動車道尾道松江線路線図	(1)
第2图	周辺遺跡分布図(1:25000)	(6)
第3图	遺跡周辺地形図(1:1000)	(10)
第4图	片野中山第9~12号古墳墳丘測量図(1:300)	(12)
第5图	片野中山第9号古墳地形測量図(上)・墳丘測量図(下)(1:200)	(13)
第6图	片野中山第9号古墳墳丘断面図(1:80)	(14)
第7图	片野中山第9号古墳埋葬施設実測図(1:30)	(15)
第8图	片野中山第9号古墳墳丘外土坑(SK1・SK2)実測図(1:20)	(16)
第9图	片野中山第9号古墳出土遺物実測図(1)(1:3)	(17)
第10图	片野中山第9号古墳出土遺物実測図(2)(1:2)	(17)
第11图	片野中山第9号古墳墳丘外土坑出土遺物実測図(1:3)	(18)
第12图	片野中山第10号古墳地形測量図(上)・墳丘測量図(下)(1:200)	(19)
第13图	片野中山第10号古墳墳丘断面図(1:80)	(20)
第14图	片野中山第10号古墳埋葬施設実測図(1:40)	(21)
第15图	片野中山第10号古墳出土遺物実測図(1:3, 1:2)	(22)
第16图	片野中山第11号古墳地形測量図(上)・墳丘測量図(下)(1:200)	(23)
第17图	片野中山第11号古墳墳丘断面図(1:80)	(24)
第18图	片野中山第11号古墳出土遺物実測図(1:3, 1:2)	(25)
第19图	片野中山第12号古墳地形測量図(上)・墳丘測量図(下)(1:200)	(26)
第20图	片野中山第12号古墳墳丘断面図(1:80)	(27)
第21图	片野中山第12号古墳埋葬施設実測図(1:30)	(28)
第22图	片野中山第12号古墳出土遺物実測図(1:3)	(29)
第23图	片野中山第9~12号古墳調査区内出土遺物実測図(1:3)	(29)
第24图	右谷遺跡遺構配置図(1:250)	(32)
第25图	右谷遺跡SB1実測図(1:60)	(33)
第26图	右谷遺跡SK1~SK4実測図(1:10, 1:20, 1:40)	(34)
第27图	右谷遺跡SX1実測図(1:60)	(35)
第28图	右谷遺跡出土遺物実測図(1)(1:3)	(37)
第29图	右谷遺跡出土遺物実測図(2)(1:2)	(39)

図 版 目 次

片野中山第9～12号古墳

図版 1 a 空中写真

- b 第9～11号古墳近景（西から）
- c 第10～12号古墳近景（南から）

図版12 片野中山第9～12号古墳出土遺物

片野中山第9古墳

図版 2 a 第9号古墳調査前（北から）

- b 第9号古墳調査前（南から）
- c 第9号古墳土層断面（西から）

図版 4 a 第9号古墳周溝内遺物出土状況（西から）

- b SK 1
- c SK 2

図版 3 a 第9号古墳墳丘（西から）

- b 第9号古墳埋葬施設（北から）
- c 第9号古墳埋葬施設遺物出土状況（西から）

片野中山第10号古墳

図版 5 a 第10号古墳調査前（北から）

- b 第10号古墳調査前（東から）
- c 第10号古墳周溝断面（東から）

図版 7 a 第10号古墳埋葬施設検出状況（西から）

- b 第10号古墳埋葬施設（西から）

図版 6 a 第10号古墳土層断面（東から）

- b 第10号古墳墳丘（北から）
- c 第10号古墳墳丘（西から）

- c 第10号古墳埋葬施設遺物出土状況（西から）

片野中山第11号古墳

図版 8 a 第11号古墳調査前近景（東から）

- b 第11号古墳土層断面（東から）
- c 第11号古墳墳丘（東から）

片野中山第12号古墳

図版 9 a 第12号古墳調査前近景（北東から）

- b 第12号古墳調査前近景（北から）
- c 第12号古墳周溝断面（西から）

図版11 a 第12号古墳埋葬施設（南から）

- b 第12号古墳1号埋葬施設（西から）
- c 第12号古墳2号埋葬施設（西から）

図版10 a 第12号古墳墳丘（北から）

- b 第12号古墳墳丘（東から）
- c 第12号古墳埋葬施設（西から）

右谷遺跡

図版13 a 空中写真

b 遺跡遠景（東から）

c SB 1 発掘（東から）

図版14 a SK 1 検出状況（西から）

b SK 1（西から）

c SK 3（東から）

図版15 a SK 4 土層断面（北東から）

b SK 4 発掘（北東から）

c SX 1 発掘（南東から）

図版16 右谷遺跡出土遺物

表 目 次

第 1 表 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う発掘調査報告書一覧	(3)
---	-------

1 はじめに

中国横断自動車道尾道松江線は本州四国連絡道路尾道今治ルート（瀬戸内しまなみ海道）と一体となって、山陰・山陽及び四国地方を南北に結ぶ地域連帯構想を推進し、この圏域の産業経済文化の発展と沿線地域の生活向上に寄与する路線として期待されている。

日本道路公団中国支社尾道工事事務所（以下「道路公団」という）は、平成13（2001）年2月、当該事業地内の文化財等の有無及び取り扱いについて、広島県教育委員会（以下「県教委」という）と協議した。県教委はこれを受けて現地調査を行い、平成14年9月事業地内に片野中山第9～12号古墳と試掘調査が必要な箇所が存在する旨回答した。

その後、平成17年10月1日に中国横断自動車道尾道松江線建設事業は日本道路公団から西日本高速道路株式会社に引き継がれ、さらに平成18年度からは国土交通省中国建設整備局三次河川国道事務所（以下「国交省」という）に引き継がれた。県教委は平成18年7月に当該箇所の試掘調査を行い、右谷遺跡の存在を確認した旨、平成19年1月に国交省に回答した。この遺跡の取り扱いについて県教委と国交省との協議の結果、設計変更による現状保存は困難との結論に達した。



第1図 中国横断自動車道尾道松江線路線図（1～22は報告書番号）

国交省は平成19年2月20日付けで三次市教育委員会（以下「市教委」という）あてに文化財保護法（以下「法」という。）第94条第1項に基づく「埋蔵文化財発掘の通知（土木工事の通知）」を提出し、市教委は同年2月21日付けで国交省あてに事前の発掘調査が必要である旨を通知した。国交省は平成19年2月26日付けで財団法人広島県教育事業団（以下「事業団」という）に片野中山第9～12号古墳及び右谷遺跡の発掘調査を依頼した。事業団は平成19年3月12日に市教委に法第92条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出を行い、同年3月16日に市教委から発掘調査を実施するよう指示を受けた。国交省と事業団では平成19年4月2日付けで委託契約を結び、事業団は同年4月16日～8月9日までの約4ヶ月間にわたり発掘調査を実施した。

本書は、以上のような経緯のもとに実施した発掘調査の成果をまとめたものである。本書が埋蔵文化財の資料として、また地域の歴史の一端を知る手がかりとして少しでも寄与できれば幸いである。

なお、発掘調査にあたっては国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所、西日本高速道路株式会社中国支社広島工事事務所、三次市教育委員会並びに地元の方々から多大なるご協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

第1表の報告書

- (1) 財団法人広島県教育事業団「牛の皮城跡・曾川2号遺跡 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(1) 2005年
- (2) 財団法人広島県教育事業団「中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2) 曾川1号遺跡(A～D地区)」2006年
- (3) 財団法人広島県教育事業団「中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(3) 池ノ奥古墳」2007年
- (4) 財団法人広島県教育事業団「中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(4) 城根遺跡 曾川1号遺跡(E地区) 牛の皮城跡(第4次)」2008年
- (5) 財団法人広島県教育事業団「中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(5) 曾川1号遺跡(G～J地区)」2008年
- (6) 財団法人広島県教育事業団「中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(6) 曾川1号遺跡(K地区)」2008年
- (7) 財団法人広島県教育事業団「中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(7) 礼場古墳・大平遺跡・後山大平古墳」2009年
- (8) 財団法人広島県教育事業団「中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(8) 北野山遺跡」2009年
- (9) 財団法人広島県教育事業団「中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(9) 向江田中山遺跡」2010年
- (10) 財団法人広島県教育事業団「中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(10) 権現第1～3号古墳」2010年
- (11) 財団法人広島県教育事業団「中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(11) 大帯奥地第1～3・7号古墳」2010年
- (12) 財団法人広島県教育事業団「中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(12) 茶臼古墳」2011年

第1表 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧

報告番号	遺跡名	地区名	調査期間	所在地	時期	内容
(1)	牛の皮城跡 (北郭群)	第1次	単状整備群 平成15年1月20日～ 3月14日	尾道市御調町 大町字二の丸	中世	城跡
		第2次	1～4郭 平成15年7月7日～ 10月31日			
第3次		西壘堀 平成15年11月10日～ 11月28日				
	曾川2号遺跡		平成15年1月20日～ 3月7日	尾道市御調町 大町字西川	古代末～中世	集落跡
(2)	曾川1号遺跡	A地区	旧・平成14年 度調査区 平成14年10月21日～ 平成15年1月17日	尾道市御調町 大町字曾川	弥生時代～中世	集落跡
		B地区	旧・P2第一 調査区 平成15年4月7日～ 5月23日			
		C地区	旧・P2第二 調査区			
		D地区	旧・P1 平成16年1月6日～ 2月5日			
(3)	池ノ奥古墳		平成16年8月23日～ 10月28日	世羅郡世羅町 宇津戸字天神	古墳時代後期	古墳
(4)	城根遺跡		平成15年1月27日～ 3月7日	尾道市御調町 大町字城根	古墳時代か	箱式石棺
	牛の皮城跡 (北郭群)	第4次 5郭	平成18年1月30日～ 2月24日	尾道市御調町 大町字二の丸	中世	城跡
	曾川1号遺跡	E地区 旧・P4	平成15年12月1日～ 12月19日	尾道市御調町 大町字米田	縄文時代後期 ～中世	遺物包含層
(5)	曾川1号遺跡	G地区	旧・P3 平成16年6月7日～ 8月6日	尾道市御調町 大町字曾川・ 米田	弥生時代～中世	集落跡
		H地区	旧・P3側道			
		I地区	旧・P4側道			
		J地区	旧・P2 平成17年1月11日～ 3月4日			
(6)	曾川1号遺跡	K地区	平成17年4月11日～ 7月1日	尾道市御調町 大町字曾川・ 米田	弥生時代～中世	集落跡
(7)	礼場古墳		平成17年11月21日～ 平成18年1月27日	三次市後山町 字礼場	古墳時代後期	古墳
	大平遺跡		平成19年6月21日～ 10月5日	三次市後山町 字大平	弥生時代後期 ～古代	集落跡
	後山大平古墳		平成19年6月21日～ 10月5日	三次市後山町 字大平	古墳時代後期	古墳
(8)	北野山遺跡		平成18年7月3日～ 8月4日	三次市吉舎町 字敷地	平安時代	仏教関連の 施設跡
(9)	向江田中山遺跡		平成18年4月17日～ 6月23日	三次市向江田 町字中山	古墳時代末 ～古代	集落跡
(10)	権現第1～3号古墳		平成17年7月11日～ 11月11日	三次市向江田 町字権現	古墳時代中期	古墳
(11)	大番奥池第1～3・7号古墳		平成18年4月17日～ 8月4日	三次市吉舎町 字敷地	古墳時代後期	古墳
(12)	茶臼古墳		平成20年7月7日～ 9月5日	三次市甲奴町 字賀字茶臼	古墳時代中期 ～古代	古墳
(13)	瀬戸越南古墳		平成19年6月25日～ 8月10日	三次市向江田 町字瀬戸越	古墳時代中期	古墳
(14)	上陣遺跡		平成19年7月9日～ 8月31日	三次市向江田 町字上陣	古墳時代後期	集落跡
(15)	和知白鳥遺跡1(旧石器時代の調査)		平成19年9月25日～ 12月21日	三次市和知町 字白鳥	後期旧石器時代	集落跡
(16)	曲第2～5号古墳		平成19年7月2日～ 9月21日	庄原市口和町 金田字本谷	古墳時代中期	古墳

報告書	遺跡名	地区名	調査期間	所在地	時期	内容
(17)	家ノ城跡	第1次	南東郭群 平成15年9月16日～ 10月31日	尾道市木之庄町木梨字城東平	中世	城跡
		第2次	南東郭群 平成16年5月17日～ 6月11日			
		第3次	1郭周辺 平成17年10月17日～ 11月11日			
		第4次	1郭・北尾根 平成18年4月17日～ 7月21日			
		第5次	1郭・北西尾根 平成19年4月16日～ 6月15日			
(18)	片野中山第9～12号古墳	平成19年4月25日～ 8月10日	三次市吉舎町敷地	古墳時代中期	古墳	
	右谷遺跡(本書)	平成19年4月25日～ 8月10日	三次市吉舎町敷地	古墳時代後期～ 古代	集落跡	
(19)	和知白鳥遺跡2(古墳時代の調査)	平成18年4月17日～ 12月22日	三次市和知町字白鳥・四拾貫町三重	古墳時代中期～ 古代	集落跡 古墳	
(20)	段遺跡	第1次	平成18年9月19日～ 12月15日	三次市四拾貫町字段	古墳時代中期～ 後期	集落跡
		第2次	平成19年9月25日～ 12月21日		後期旧石器時代	集落跡
(21)	川平第1号古墳	平成20年4月21日～ 6月20日	庄原市口和町常定字川平	古墳時代後期	古墳	
	常定川平1号遺跡				集落跡	
	常定川平2号遺跡			縄文時代	落し穴・墓	
(22)	稲干場第2～4・9号古墳	平成19年10月9日～ 12月23日	庄原市口和町大字稲干場	弥生時代後期～ 古墳時代後期	集落跡・古墳	

- (13) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(13) 瀬戸越南古墳』2011年
- (14) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(14) 上陣遺跡』2011年
- (15) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(15) 和知白鳥遺跡(第2次)』2011年
- (16) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(16) 曲第2～5号古墳』2011年
- (17) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(17) 家ノ城跡(第1～5次)』2012年
- (18) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(18) 片野中山第9～12号古墳・右谷遺跡』2012年
- (19) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(19) 和知白鳥遺跡(第1次)』2012年
- (20) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(20) 団遺跡』2012年
- (21) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(21) 川平第1号古墳 常定川平1・2号遺跡』2012年
- (22) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(22) 稲干場第2～4・9号古墳』2012年

2 位置と環境

片野中山第9～12号古墳及び右谷遺跡が存在する吉舎町は平成16（2004）年4月1日の合併により旧来の双三郡から三次市となった。吉舎町は三次市の南東部に当たり、地形的にも三次盆地の南東端に位置している。町域のほとんどが山林（約80%）で、耕地は10%程である。町の中央を北流する馬洗川および北東部を北流する上下川の両河川沿い及びその支流沿いに耕地が帯状に広がっている。

したがって、遺跡の多くはこの両河川及び支流沿いに存在しており、中世には和智氏の本拠地として発展し、以後も陰陽を結ぶ交通の要衝として栄えてきた。ここでは古墳時代及び古代・中世の遺跡について概観する。

古墳時代

古墳時代の遺跡は多く確認されている。その大半は古墳である。古墳の多くは直径が10m程の円墳で、複数の円墳が近接して存在し古墳群を形成する例と単独で存在する例がある。

古墳の分布状況を見ると町内の北部にあたる矢野地・海田原・三玉に比較的大きな古墳が存在し、また馬洗川沿いに展開する丘陵上にも多くの古墳が存在することなどから、この地域の中心の一つであったと思われる。

吉舎町内の古墳は前期の古墳については不明な点が多いが、中期になると増加し、横穴式石室が埋葬施設となる後期の古墳は再び少なくなる。ただし、内容が不明の古墳もあるので、前期もしくは後期の古墳が増える可能性もある。

県史跡三玉第1号古墳（三玉大塚古墳）（三玉）は全長41mの帆立貝形古墳で、確認調査により墳丘斜面に墓石を3段に巡らせる構造が判明した。各段には平坦面があり、二段目の平坦面と同じ高さの方形基壇上に埴輪を巡らせている。埋葬施設は横穴式石室で、副葬品として変形文鏡、珠文鏡、筒形銅器、玉類、有孔円板、鉄斧、鉄やりがんな、鉄刀、短甲、冑、轡、矛、砥石などが出土している。築造はこれらの遺物から5世紀後半頃と推定されている。下矢井南第4号古墳（敷地）は直径18m、高さ3～2mの円墳で、埋葬施設が5基確認されている。このうち墳頂近くに並列された4基からは副葬品として鉄製刀子2・堅櫛1、鉄製刀子1・鉄剣2、鉄鎌1・鉄斧2・鉄製刀子1・鉄剣1・堅櫛1、堅櫛1が出土している。さらに墳頂部からは筒形石製品1・土師器片が出土している。これらの出土遺物などから本古墳は4世紀末から5世紀初頭の築造と推定されている。大番奥池第1～3号古墳（敷地）は6世紀前半頃の古墳である。いずれも直径が8～11mの小規模な円墳である。第2号古墳では並列に配置された埋葬施設を2基検出しており、いずれも木棺と推定されている。北側の木棺からは鉄製刀子1・鉄鏃3・鉄鎌1・用途不明鉄製品1が、また南側の木棺からは須恵器杯身3・杯蓋1・鉄鎌1が出土している。第3号古墳からは須恵器杯身1・杯蓋1が、墳頂部付近の土坑墓からは鉄刀1・鉄鏃4が、後世に一部破壊された埋葬施設からは鉄製刀子1が出土している。燎東古墳（矢井）は尾根の先端に位置する



第2図 周辺遺跡分布図 (1 : 25000)

A片野中山第9～12号古墳 B右谷遺跡

- 1片野中山古墳群 2反遺跡 3稲荷山A古墳群 4稲荷山B古墳群 5稲荷山C古墳群 6稲荷山D古墳群
 7稲荷山E古墳群 8真御堂古墳群 9塩ノ裏古墳群 10塩ノ裏東古墳群 11鴻鳥池古墳群 12一本堂古墳群
 13敷地本郷遺跡 14一之渡古墳群 15田尻古墳群 16八幡山古墳群 17八幡山北古墳 18明神山古墳群
 19大判奥池古墳群 20下矢井北古墳群 21塚古墳 22塚東古墳 23中山古墳群 24下矢井南古墳群
 25北野山遺跡 26矢井中山古墳群 27岡ノ采古墳 28宮ノ前古墳群 29後口山古墳群 30海田原古墳群

直径8mの小規模な円墳である。埋葬施設として木棺墓2と石蓋土坑1が確認されている。木棺墓は墳丘のほぼ中央に並列されており、石蓋土坑は墳裾部に存在する。遺物は木棺から少し離れたところにまとめて置かれており、木棺と共に供献された可能性が指摘されている。古墳はこれらの出土遺物などから6世紀の前半頃に築造されたと推測されている。

なお、知和の寺津第3号古墳⁽¹⁾は調査により県内では数少ない前方後方形の古墳と判明し、同一丘陵上に存在する寺津第1・2・4～6号古墳とともに現状保存されている。

古墳以外でこの時期の遺物が発見された遺跡には、徳市遺跡、敷地本郷遺跡、八斗田遺跡、三田戸遺跡などがある。三田戸遺跡では土坑が検出され、土師器・須恵器が出土しており、古墳時代から古代の集落跡と推測されている。

古代

『和名抄』によると、平安時代初め三谷郡には三谷・松部（私部の誤記か）・江田・額田・刑部の五つの郷があり、吉舎町は上安田・知和地区が甲奴郡に、徳市が世羅郡に属しており、それ以外の場所は三谷郡に属し、私部郷に含まれたと思われる。

この時代の遺跡は北野山遺跡⁽⁶⁾（敷地）で掘立柱建物跡2・柱穴列1・土坑1が検出されており、調査区内から土師器・須恵器・鉄釘・用途不明鉄製品・鉄滓（碗形滓）が出土している。遺跡の時期については出土遺物などから概ね9世紀後半から10世紀初頭で、その性格については出土遺物に転用硯や鉄鉢形土器、灯明用と推定できる杯の存在などから仏教関連の施設跡と推測されている。

このほか八斗田遺跡や三田戸遺跡で8世紀頃の遺物が採集されて、上安田廃寺跡（上安田）で古代末頃と考えられる瓦が見つまっている。

中世

高野山領の太田庄から三次・山陰への街道筋にあたり、人や物資が集まる中継地として繁栄した。この時期、大きな影響をおよぼしたのは武蔵国から下向した広沢氏の分家である和智氏である。建久3（1192）年三谷郡12郷の地頭職を得た広沢氏は和智（三次市）に移住し、13世紀には和智・江田の両氏に分かれる。和智氏は三谷郡北部を領有し、その後本拠を吉舎に移す。戦国期には尼子氏の配下となるが、やがて毛利氏に転ずる。この時期、和智氏の南天山城周辺では町民が定着し、繁栄する。

この時期の遺跡としては城館跡・墓所・寺院がある。城館跡では平松城跡（三五）、南天山城跡（吉舎）などが確認されている。墓所では和智誠春墓（丸田）や和智勝之墓（清綱）などがある。寺院では県史跡吉寺廃寺跡（桧）・上安田廃寺跡（上安田）などがある。

注

(1) 吉舎町教育委員会『三五大塚古墳』1983

- (2) 財団法人広島県教育事業団 広島県歴史民俗資料館「中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る備北地域埋蔵文化財発掘調査報告会—資料—」2008
- (3) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(11)大番奥池第1～3・7号古墳』2010
- (4) 吉舎町教育委員会『篠東古墳』1995
- (5) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「寺津古墳群」『灰塚ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』1994
- (6) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(8)北野山遺跡』2009

3 調査の概要

(1) 片野中山第9～12号古墳(第3・4図, 図版1)

片野中山第9～12号古墳は片野中山古墳群(全15基で構成)の一部である。片野中山古墳群は標高381mの山塊から北側に樹枝状に延びる尾根の一角にあって、南北長さ530m、標高225～200mの範囲に形成されている。比較的長い範囲に配された古墳の状況を見てゆくといくつかのまとまりを見つけることができる。

まず片野川と矢井川及び馬洗川の堆積により形成された平野部と接する小高い丘陵上に存在する第1～4号古墳の4基がある。この尾根先端部の独立丘陵上に存在する一群から南側に約300m離れた尾根上に第5～8号古墳の4基が存在する。この第5～8号古墳の存在する尾根と谷を一つはさんだ東側約70mに今回報告する第9～12号古墳が存在する。さらにこの小群の南側150m程南側に第13～15号古墳の3基が存在する。以上のように本古墳群は4つの小群に分かれているといえる。

これらの古墳は表面観察の限りではいずれも直径が10m程度の小規模な円墳である。

調査は南から北へ延びる尾根上に位置する古墳であったので、古墳の中央部を起点としてそこからまず尾根の方向に合わせて南北の土層観察用の畦を設定し、これから直角に東西方向の土層観察用畦を設定した。また、古墳の周溝が近接している場合は関係する古墳の間に土層観察用の畦を適宜設定した。

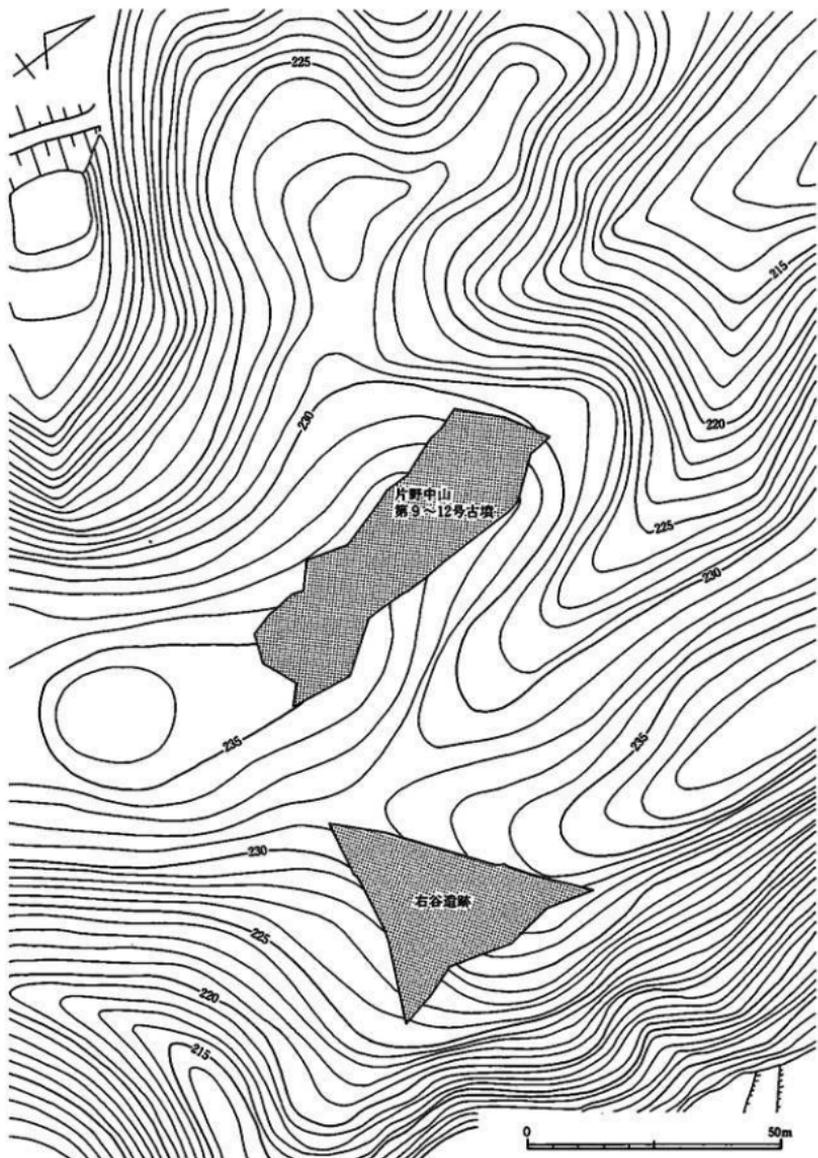
調査の結果、第9号古墳は直径9m、高さ1mの円墳で、中央部に2.25×1mの埋葬施設(土坑)を検出した。土坑内から石製品が出土している。第10号古墳は直径7.5m、高さ1mの円墳で、中央部に2.88×1.76mの埋葬施設(土坑)を検出した。埋葬施設から刀子が出土している。第11号古墳は現状で半壊していたが、直径10.5m、高さ1.2mの円墳と推定される。埋葬施設は検出できなかった。第12号古墳は直径10m、高さ1.5mの円墳で、中央部に主軸を東西方向して並列する埋葬施設2(土坑)を検出した。

(2) 右谷遺跡(第3図, 図版13a, 13b)

遺跡は片野中山第9～12号古墳の存在する尾根と小さな谷状の地形を挟んだ東側の尾根の東斜面に位置する。片野中山第12号古墳と遺跡距離は約50mである。遺跡の北側約70mには片野中山第5～8号古墳が存在する。周辺の水田との標高差は30mである。また遺跡の東側450mの尾根上には前年度に発掘調査を一部実施した大番奥池古墳群が存在する。

調査は遺構検出面まで(地表面からの深さ20～40cm)は機械を使用して掘り下げを行い、遺構検出作業及び遺構の掘り下げは人力で行った。

調査の結果、古墳時代後期の堅穴住居跡(SB1)1、古代の火葬墓(SK1)1、土坑(SK3・4)2、炉跡(SK2)1、性格不明遺構(SX1)1を検出した。これらの遺構及び調査区内から弥生土器、土師器、須恵器、石器が出土した。



第3圖 遺跡周辺地形図 (1:1000)

4 調査の遺跡

(1) 片野中山第9号古墳

A 立地と現状 (第5図・図版2a, 2b)

古墳は標高318mから北に派生する樹枝状の狭い尾根上(標高233.3m)に造られており、周辺の可耕地との標高差は50mである。現状は山林で、古墳のある尾根の両側は小さな谷状の地形となっている。南側約8mには片野中山第10号古墳、東側約70mには右谷遺跡が存在する。片野中山古墳群の第9～12号古墳は4基で支群を形成しているが、中でも最も北側に位置する古墳である。

古墳は墳丘が低く、周辺の地形とほとんど変わりがなかった。木を伐開してようやく墳丘の盛り上がりが見え確認できた。第9号古墳の墳丘は南側にある第10号古墳などに比べると著しく低い。

墳丘の周囲がわずかに凹んでおり、古墳の周囲に周溝の存在が予想できた。表面観察では墳丘の直径は約10mで、北側の山の高いところを中心に幅1m程の周溝が巡っているものと推定できた。

B 墳丘 (第5図・図版2c, 3a)

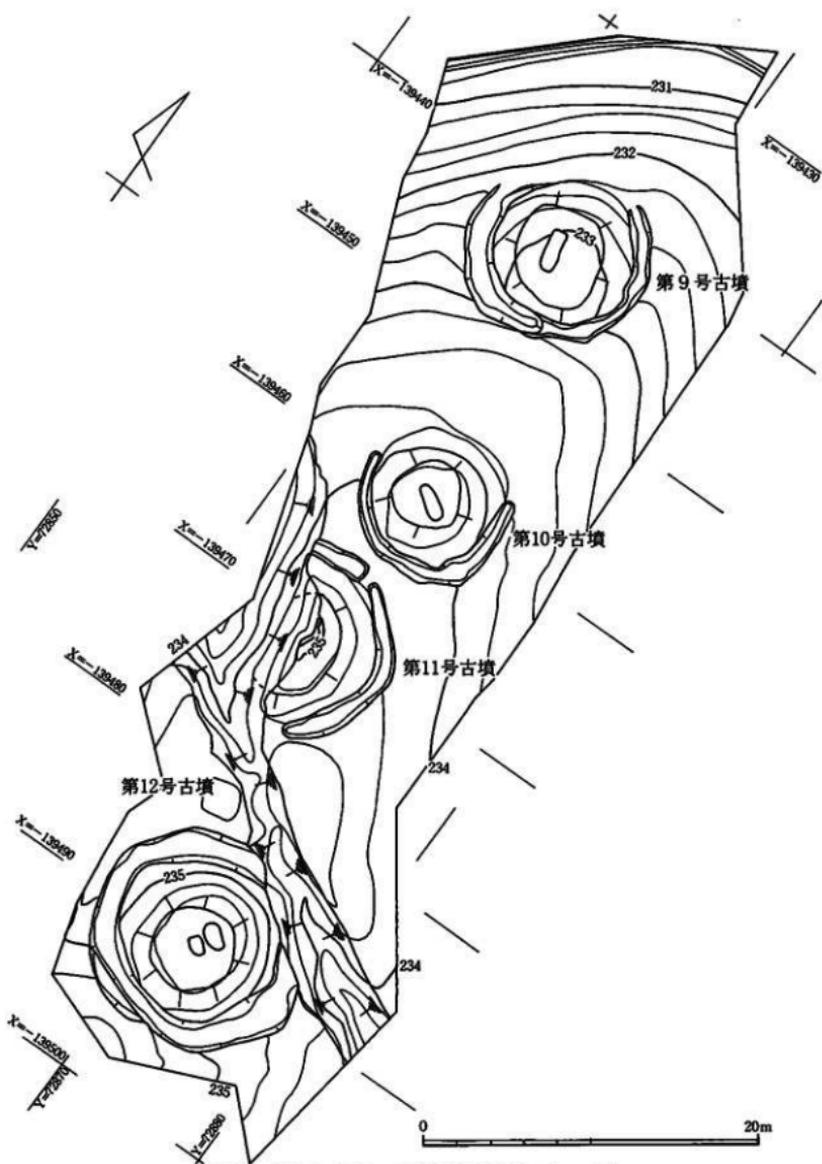
調査は土層観察用の畦を古墳の中心部からほぼ東西南北に設定して、表土層の除去及び周溝の検出を行った。古墳の表土は約10cm程度で、表土を除去すると盛り土が露出し、直径9m・高さ1mの円墳であると判明した。

古墳は南から北へ延びる狭い尾根を利用して、古墳の南側に周溝の掘削をしている。周溝の幅は1.8～1.2mで深さ0.3mで一定していない。南側の尾根の高い側を中心に円形に2/3周程度巡り、北側には巡っていない。

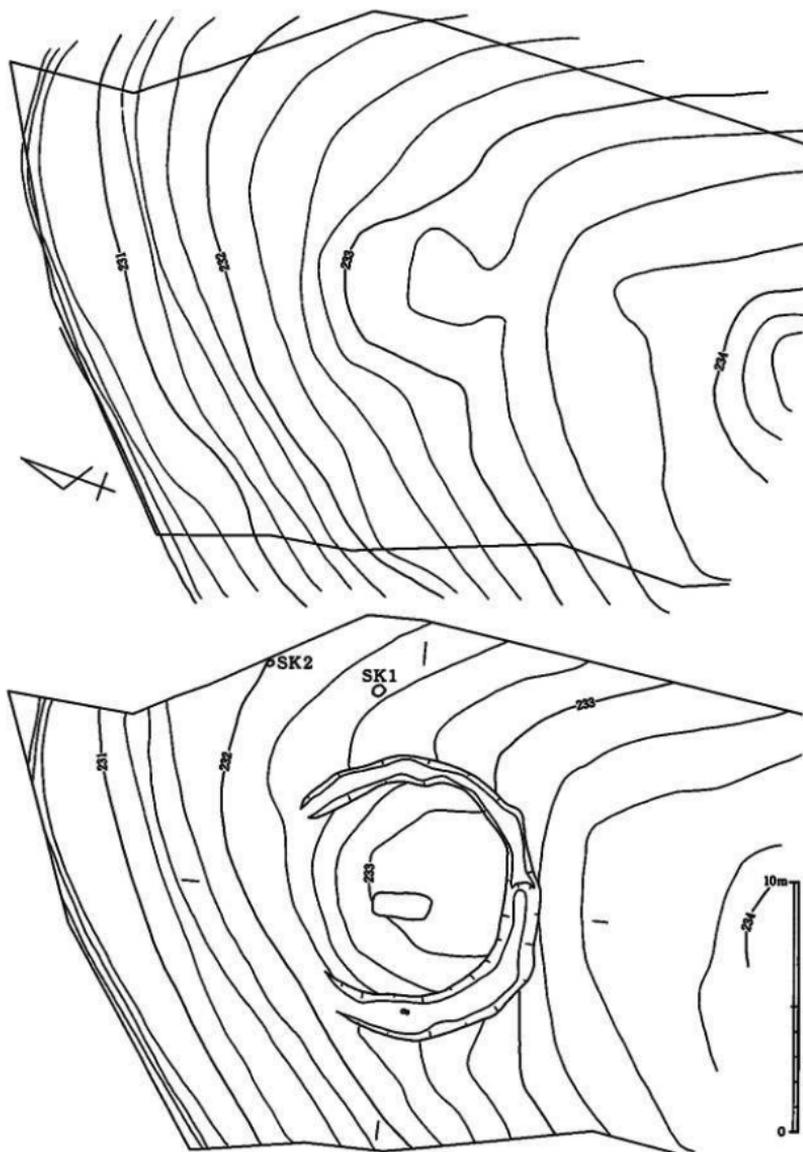
周溝が古墳の北側になくことから古墳は北側から見た墳丘の大きさを強調する設計となっている。周溝の断面は概ね逆台形ないしは皿状を呈している。周溝西側の底面から須恵器(第9図1, 2)が蓋を開けた状態で両者とも口縁部を上にして出土している。

墳丘は周溝の掘削によって区画された墳丘基底面の作出と盛り土作業からなる。墳丘基底面は旧地形を少し整地する程度で、基底面には少し凹凸が見受けられる。これらの凹凸を周溝掘削時の排土で少し整地をし、この整地面から盛り土をしている。ただし、現状では盛り土の多くが流出したと思われる、土層観察で確認できた厚さは0.1m程度が残存していたにすぎなかった。

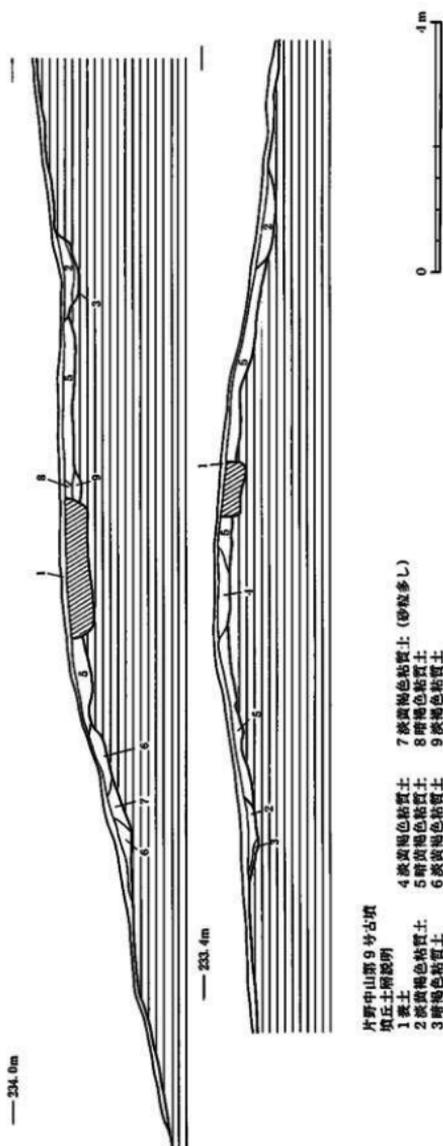
埋葬施設はこの盛り土の上面で確認できたが、盛り土とほとんど区別がつかなかった。埋葬施設は墳丘基底面に近い位置に設置され、盛り土作業後直ちに造られた可能性が高い。



第4圖 片野中山第9～12号古墳墳丘測量圖 (1 : 300)



第5圖 片野中山第9号古墳地形測量圖(上)・墳丘測量圖(下)(1:200)



第6図 片野中山第9号古墳墳丘断面図 (1:80)

C 埋葬施設 (第7図・図版3b)

古墳の中央からやや西よりで土坑墓1を確認できた。平面形は幅が1m~0.75mで、長さ2.25mの長方形で、床面までの深さは0.28mであった。長軸方向はN10°30'Wで、ほぼ尾根線に平行して造られている。

断面形は坑底面が上端に比べて少しせまくなる箱型となっている。土坑の底面から約0.05mの厚さで一部整地土を入れてここを床面としているようである。土坑の断面からは木棺痕跡は確認できなかった。

遺物は南側の短辺側の際で有孔石製品 (第10図6) が出土している。

D 墳丘外土坑

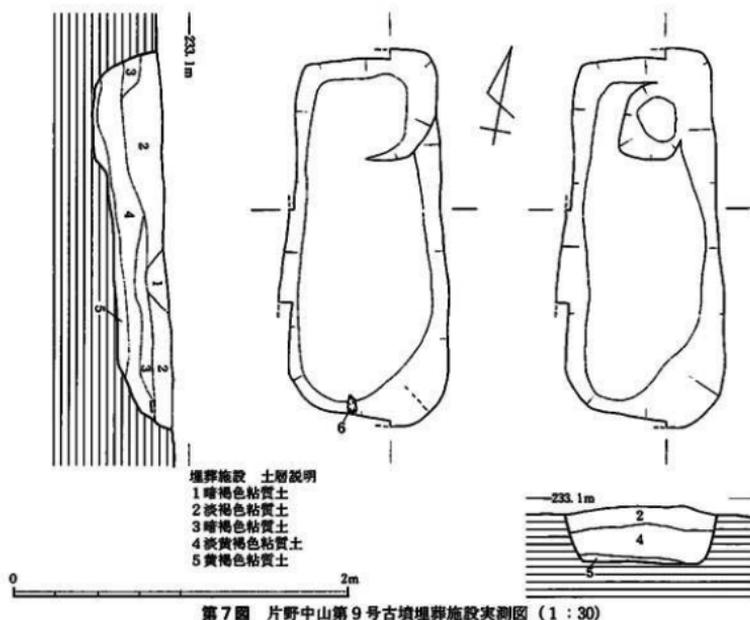
墳丘の東側2.5mと北東側5mで土器棺と思われる遺構を検出した。古墳に近い側からSK1・SK2と呼称した。

SK1 (第8図・図版4b)

埋葬施設から東側約8.5mにある墳丘外で検出した土坑である。0.44m×0.49m、深さ0.27mの不整な円形の土坑に土師器 (第11図8) を立てて据え、その上に須恵器 (第11図7) の底部で蓋をしていた。内部からは副葬品等は出土していないが、形状から土器棺墓と推測できる。

SK2 (第8図・図版4c)

埋葬施設から北東側約12.5mにある墳丘外で検出した土坑である。0.87m



×0.74m、深さ0.34mのやや歪な方形の土坑に土器(第11図9)を立てて据えていた。内部からは副葬品等は出土していないが、形状から土器棺墓と推測できる。

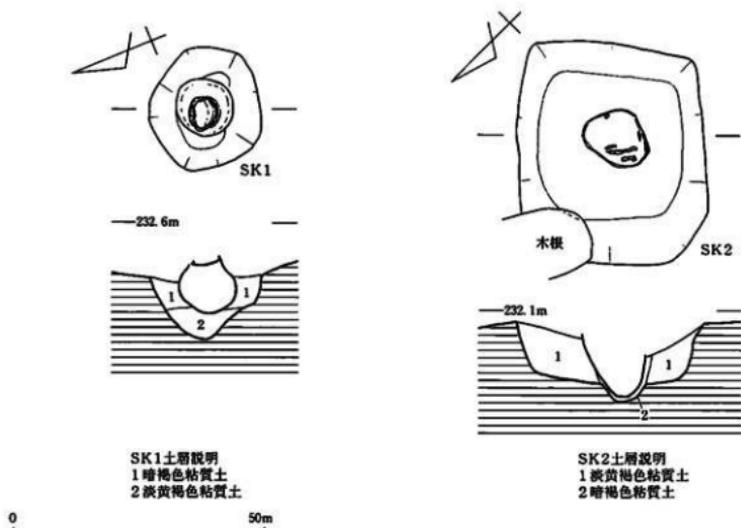
E 出土遺物(第9, 11図, 図版12)

埋葬施設や周溝内から須恵器や石製品が出土し、墳丘外で見つかった土坑から土師器や弥生土器が出土している。

a 土器(第9・11図, 図版12)

第9図1～5・第11図7は須恵器である。第11図8は土師器, 第11図9は弥生土器である。1は杯蓋で, 完形品である。口縁部直径12.0cm, 器高5.7cmで, 天井部外面中央部に扁平なボタン状のつまみが付く。つまみの直径は3.3cmで, 高さは1.2cmである。天井部から緩やかに弧を描いて体部境にいたる。体部境では断面三角形の段をなし, 体部はほぼ垂直に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は角張っておさめている。天井部から体部はヘラ削り後ナデ, 口縁部以下は回転ナデである。色調は淡青灰色で, 焼成は普通である。

2は杯身で, 完形品である。前述した1とセットで周溝西側の底面から出土した。口縁部径



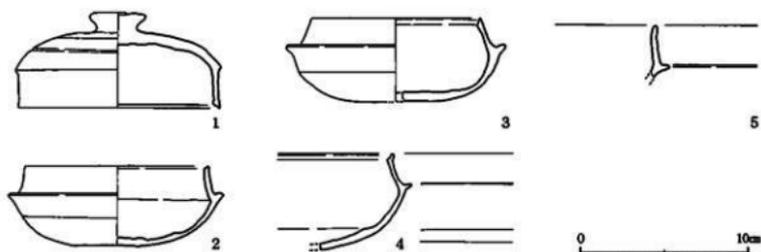
第8圖 片野中山第9号古墳墳丘外土坑 (SK1・SK2) 実測圖 (1:20)

10.2cm, 受け部径13.7cm, 器高4.7cmである。底部から体部は緩やかに円弧状に延びて受け部にいたる。受け部は短く外側に伸びて断面三角形状を成す。口縁部は受け部から内側斜め上方にわずかに外湾気味に伸びて口縁端部にいたる。口縁端部は角張り気味におさめている。外面体部中位までへら削り, 中位からは回転ナデである。内面中央部に定方向のナデが施されている。色調は淡青灰色で, 焼成は良好である。

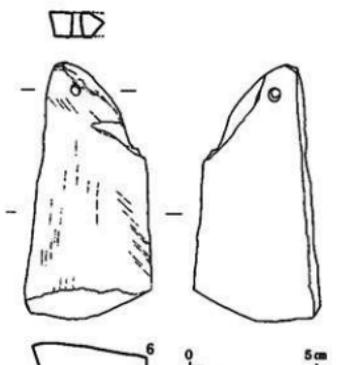
3は南側の土層観察用哇から(1層)の出土で, 杯身の底部から口縁部である。復元口縁部径10.0cm, 復元受け部径13.0cm, 器高5.0cmである。底部から体部は緩やかに円弧状に延びて受け部にいたる。受け部は外側上方に伸びて端部を角張り気味におさめている。口縁部は受け部から内側斜め上方にまっすぐ伸びて口縁端部にいたる。口縁端部は角張り気味におさめている。外面体部中位までへら削り, 中位からは回転ナデである。内面中央部に定方向のナデが施されている。色調は淡青灰色で, 焼成は良好である。

4は南東側の周溝内中位からの出土である。杯身の底部から口縁部である。底部から体部は緩やかな弧状を描いて受け部にいたる。受け部は外側斜め上方に短く延びて端部を丸くおさめている。口縁部は受け部から斜め上方にやや内傾しつつ真っ直ぐ伸びて口縁端部にいたる。口縁端部は内側に段が付き端部を丸くおさめている。底部はへら削りで体部から口縁部及び内面は回転ナデである。色調は淡青灰色で, 焼成は普通である。

5は南側の土層観察用哇から(1層)の出土である。杯身の口縁部である。受け部は外側に伸



第9図 片野中山第9号古墳出土遺物実測図(1)(1:3)



第10図 片野中山第9号古墳出土遺物実測図
(2)(1:2)

びて丸くおさめている。口縁部はほぼ垂直に真っ直ぐ立ち上がり口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。調整は回転ナデで、色調は淡黄灰色、焼成はやや不良である。

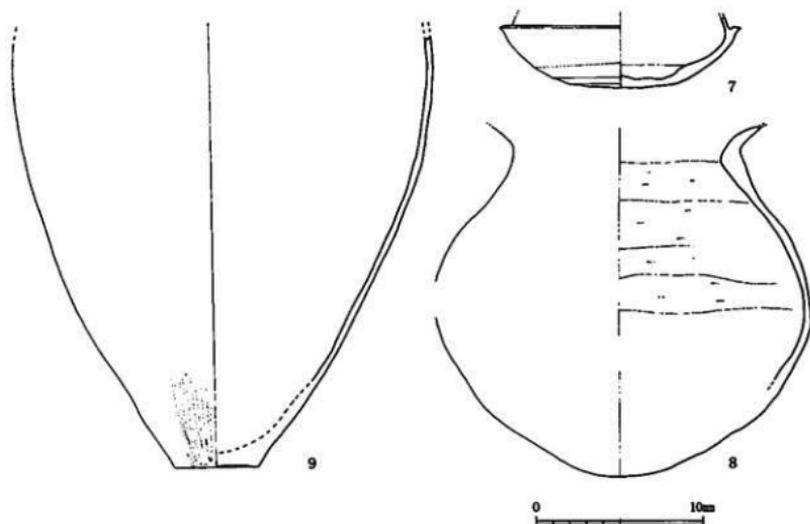
7はSK1で土師器の蓋として使用されていた杯身である。口縁端部が欠けている。復元受け部径は14.4cmである。底部から体部は緩やかに弧を描きながら受け部にいたる。受け部は外側に水平に短く伸びて断面三角形になり端部を尖り気味に収めている。口縁部はやや内傾しつつ上方に延びると思われる。体部中位まではヘラ削り、中位から上は回転ナデで、内面中央に定方向のナデが施されている。色調は暗青灰色、焼成は普通である。

8は土師器の底部から口縁部下半である。SK1からの出土である。口縁端部が若干欠けている。現状での器高は21.0cmで、口縁部復元径は17.0cm、胴部最大径は22.9cmである。底部は丸底で、胴部はほぼ球形であるが、少し胴が膨らんでいる。頸部付近でく字形に外側に屈曲して口縁部にいたる。口縁部は外側斜め上方に延びて口縁端部にいたると思われる。内面は頸部付近で肥厚している。内面頸部から胴部中位にかけてヘラ削りを施す。色調は淡赤褐色で、焼成及び遺存状況は不良で、器表面の風化が顕著である。

9は弥生土器の底部から胴部である。SK2からの出土である。底部は平底で、胴部は上部が欠失しているが、長胴形であろうと思われる。器壁は0.5cm程度で比較的薄い。底径は5.0cm、現器高は26.0cm、胴部復元径は25.1cmである。外面底部付近にハケメが観察できる。底部はナデである。色調は淡黄褐色で、焼成は普通であるが、遺存状況はやや不良である。

b 石製品(第10図, 図版12)

6は有孔石製品である。幅は4.9cm~4.1cm、長さ10.2cm、重さ79gである。ただし、幅広の端



第11図 片野中山第9号古墳墳丘外土坑出土遺物実測図(3)(1:3)

部が欠損しているので本来はこれより大きかったと思われる。平面形は孔のある方がない方よりもやや幅の狭くなる楕形である。孔は直径0.5~0.35cmである。一方方向からあけられており、孔の周囲に糸擦れのような痕跡が微かに残っているので、吊していたものと思われる。四面が良く磨かれていて、平滑である。

(2) 片野中山第10号古墳

A 立地と現状(第12図, 図版5a・5b)

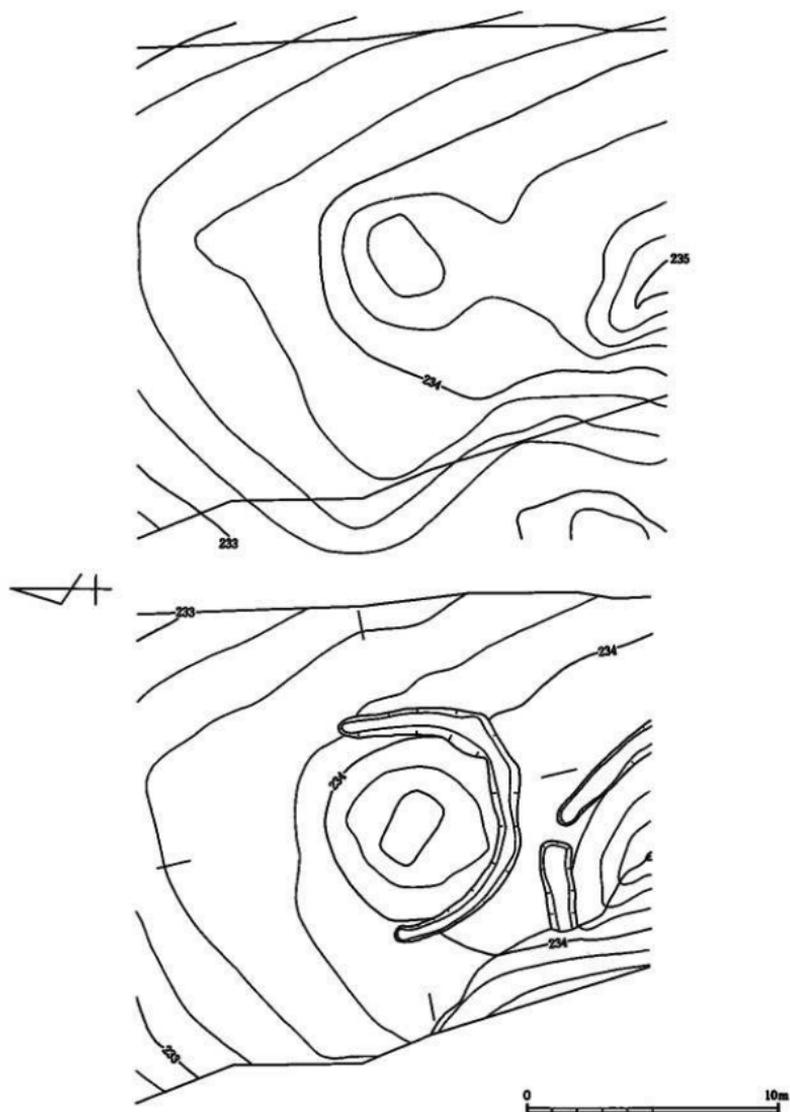
古墳は標高318mから北に派生する樹枝状の小さな尾根上(標高234.6m)に造られており、周辺の可耕地との標高差は約50mである。現状は山林で、古墳のある尾根の両側には小さな谷状の地形となっている。また南側約8mには片野中山第9号古墳が、北側約1mには片野中山第11号古墳が存在する。

古墳は表面観察では墳丘の直径は8mで、北側の高いところを中心に幅1m程の溝が巡っていると推定できた。

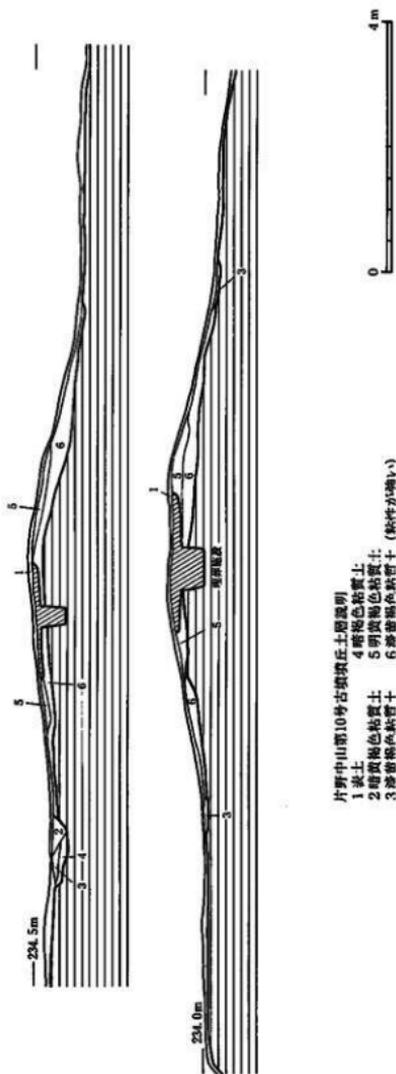
また、第11号古墳とはお互いに接するように存在するので、この周溝は北側にある第11号古墳の周溝もしくは墳丘の一部と接している可能性も想定された。

B 墳丘(第12図, 図版6b・6c)

調査は土層観察用の畦を古墳の中心部からほぼ東西南北に設定し、表土層の除去及び周溝の検



第12圖 片野中山第10号古墳地形測量圖(上)・墳丘測量圖(下)(1:200)



第13図 片野中山第10号古墳墳丘断面 (1 : 80)

出を行った。表土は約0.1m程度であった。

古墳間の前後関係を確認するため、第11号古墳の南側墳裾にも繋がるような土層観察用の畦を設定したが、第11号古墳との前後関係は確認できなかった。

調査の結果、直径7.5m・高さ1mの円墳であると判明した。

古墳は尾根の地形を利用して、古墳の北側で周溝の掘削をしている。周溝の幅は1.4～0.9mで深さ0.3mで一定していない。周溝は尾根の高い側にあたる南側を中心として円形に1/2周程巡り、北畔分には巡っていない。

第9号古墳と同じように北側から見た大きさを強調する設計となっている。周溝の断面は概ね逆台形ないしは皿状を呈している。

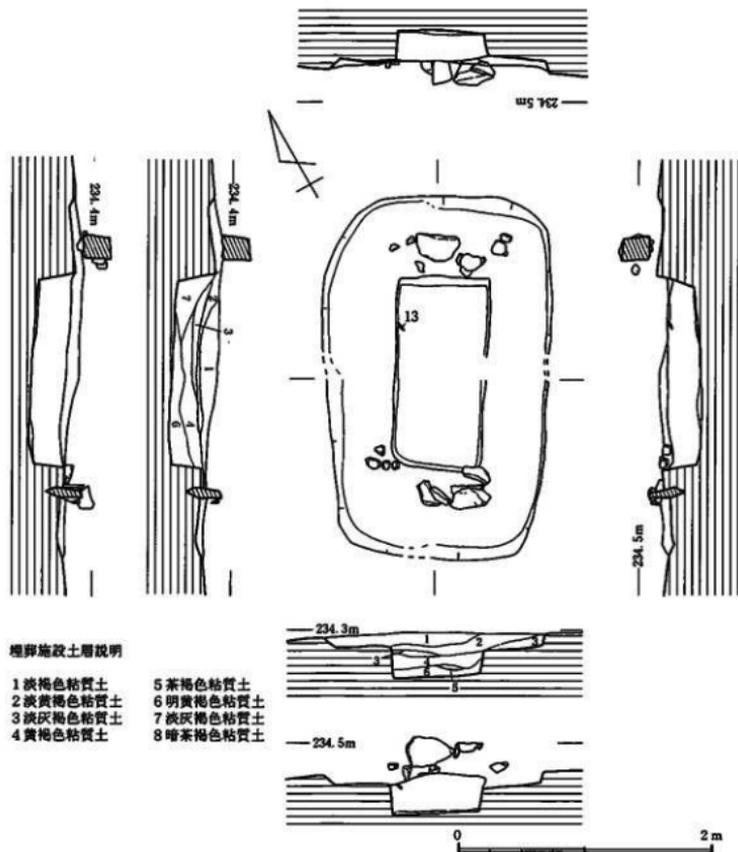
墳丘は周溝の掘削によって区画された墳丘基底面の作出と盛り土作業からなる。墳丘基底面は旧地形を少し整地する程度で、周溝掘削時の排土等により少し整地をし、この整地面から盛り土をしている。整地面の上に厚さ0.4～0.2m程度残っていた。第9号古墳に比べると直径は少し小さくなるが、盛り土はやや厚くなっている。

埋葬施設は盛り土の上面で確認したが、盛り土との区別が難しかったので、石列の周辺を中心に精査を行い、検出することができた。埋葬施設は前述した第9号古墳と同様に墳丘基底面に近い位置に設置され、盛土作業と並行して造られた可能性が高い。

C 埋葬施設 (第14図、図版7b)

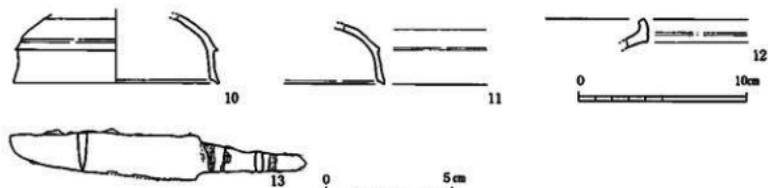
古墳のほぼ中央部で短辺側(両小口部)に石組みを持つ土坑を1基検出した。

北東側の石組みは幅0.75mほどあり、中央部に0.17×0.45×0.25mのやや角張った石材



第14図 片野中山第10号古墳埋葬施設実測図(1:40)

を組んで据えている。その周辺に拳大の礫が散在する。これらの石材はいずれも中央部の土坑よりも外側に配されている。南西側の石組みは幅0.60mほどあるが、その位置が土坑の主軸よりも南西側半分に偏っているため、恐らくはこの石組みに相対する北西側にも同程度の規模の石組みが存在したと思われる。南西側石組みでは土坑の中軸線上に0.20×0.30×0.05mの板状の礫が墓坑の外側にかなり深く刺さるように設置されている。これらの石組みの上端は北東側の方が高くなっている。これらの石組みを含んで墓坑の周囲には長さ2.88m、幅1.78m、深さ0.34mの浅い掘り込みがあり、墓坑は石組みに接するように長さ1.55m、幅0.72m、深さ0.30mの長方形の土坑で、主軸方向はN33°Eである。



第15図 片野中山第10号古墳出土遺物実測図(1)(1:3, 1:2)

内側の墓坑の南側側面付近から刀子(第15図13)が刃部を内側に向けて横に置いたように出土した。

以上のことから墓坑は組み合わせ式の箱型木棺もしくは木蓋土坑などが想定できる。

D 出土遺物(第15図, 図版12)

a 土器

10・11はいずれも須恵器杯蓋である。10は天井部下半から口縁部である。北側の土層観察用哇から(1層)の出土である。復元口径は12.0cmで、現器高は4.1cmである。天井部は緩やかに弧を描いて口縁部にいたる。口縁部との境に断面三角形の段を成す。口縁部はほぼ垂直に真っ直ぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は角張気味におさめている。天井部上半はヘラ削り、以下回転ナデである。色調は暗灰色で、焼成は普通である。11は天井部下半から口縁部片である。北側土層観察用哇(1層)からの出土である。天井部は緩やかな弧を描いて口縁部にいたる。口縁部境は段を成す。口縁部はわずかに外に広がって口縁端部にいたる。口縁端部は角張気味におさめている。色調は暗灰色で、焼成は良好である。

12は弥生土器で、変形土器の口縁部片である。中央部の盛り土内(5層)から出土している。口縁は斜め上方に短く拡張されて、拡張部外面に幅の狭い凹線が一条走る。端部は丸くおさめている。内面はヨコナデである。色調は淡黄褐色で、焼成は不良である。

b 鉄器

13は刀子である。埋葬施設からの出土である。柄尻が欠けている。現長11.8cm、幅1.8cm、重さ14.3gで、刃部長は7.4cmである。柄の部分に木質が付着している。

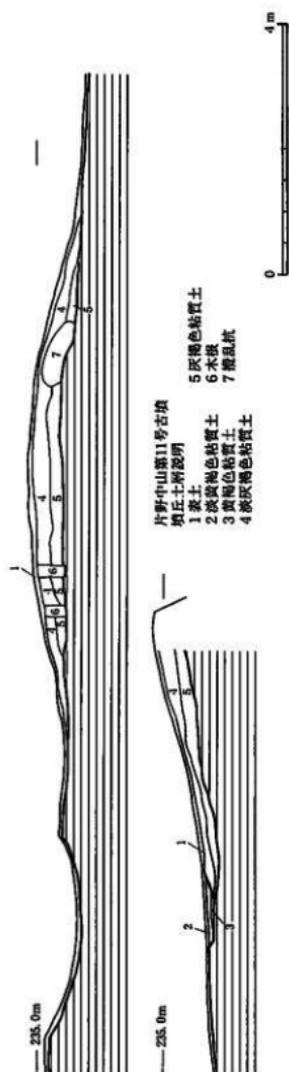
(3) 片野中山第11号古墳

A 立地と現状(第16図, 図版8a)

古墳は標高318mから北に派生する樹枝状の小さな尾根上(標高235.2m)に造られており、周辺の可耕地のと標高差は52mである。現状は山林で、古墳のある尾根の両側は小さな谷の地形となっている。北側1mには第10号古墳が、南東側7mには第12号古墳が存在する。片野中山古墳群では第9～12号古墳は支群を形成するが、この支群内では第12号古墳に次いで南側に位置す



第16圖 片野中山第11号古墳地形測量圖(上)・墳丘測量圖(下)(1:200)



第17図 片野中山第11号古墳墳丘断面
(1:80)

る古墳である。

古墳は既に土取等により墳丘の半分以上が消滅していた。しかしながら、墳丘は明瞭であり、古墳の現状での規模は表面観察では、墳丘の直径は約0.1mで、古墳の北側を中心に幅1m程の溝が巡っていると推定できた。

B 墳丘 (第16図, 図版8c)

調査は古墳の頂部が土層観察用の畦に含まれるように南北方向及び古墳頂部からこれに直交する畦を東西方向に設定して、表土の除去及び掘り下げを行った。表土は概ね10cm程度であった。調査の結果、推定直径10.5m、高さ1.2mの円墳であると判明した。

古墳は尾根の地形を利用して、周溝の掘削を行っている。周溝の幅は1.3~0.8mで深さ0.3mで一定していない。尾根の高い側である南側を中心として円形にほぼ全周していたものと推定できる。ただし削平されている西側の状況は不明である。

墳丘は周溝を掘削した土を利用して盛り土を行ったと思われる。墳丘の土層観察では平坦面を造ってその平坦面から土盛りをしていた状況が窺われる。盛り土の厚さは現状で0.40m程である。

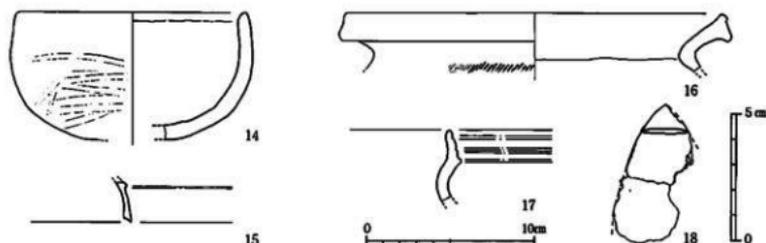
埋葬施設は検出できなかったが、墳丘の2/3が山道や土取りなどによって破壊されているので、この部分に存在した可能性がある。

C 出土遺物 (第18図, 図版12)

a 土器

14は土師器碗の底部から口縁部である。周溝の南東部埋土中からの出土である。復元口径13.6cm、器高7.6cmである。底部は丸底で、体部は弧を描きながら口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。外面は平行叩き痕がある。内面はナデている。

15は須恵器杯蓋の口縁部片である。周溝の南東部埋土中からの出土である。天井部との境に断面三角形の段を有する。口縁部はほぼ垂直に真っ直ぐ延びて口縁端部



第18図 片野中山第11号古墳出土遺物実測図(1:3, 1:2)

にいたる。口縁端部は角張り気味におさめている。

16・17は弥生土器である。いずれも墳丘表土下の4層からの出土である。16は変形土器の頸部から口縁部である。頸部はく字形に屈曲し、口縁部は上下に拡張されて口縁端部にいたる。口縁端部はやや凹む端面となっている。頸部にはヘラ状工具による刺突文が巡る。

17は壺形土器の頸部から口縁部である。頸部は緩く外側に弧を描きつつ口縁部にいたる。口縁部は斜め内側上方に真っ直ぐ立ち上がり口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。口縁部外面には幅狭の凹線が3条巡る。

b 鉄器 (第18図, 図版12)

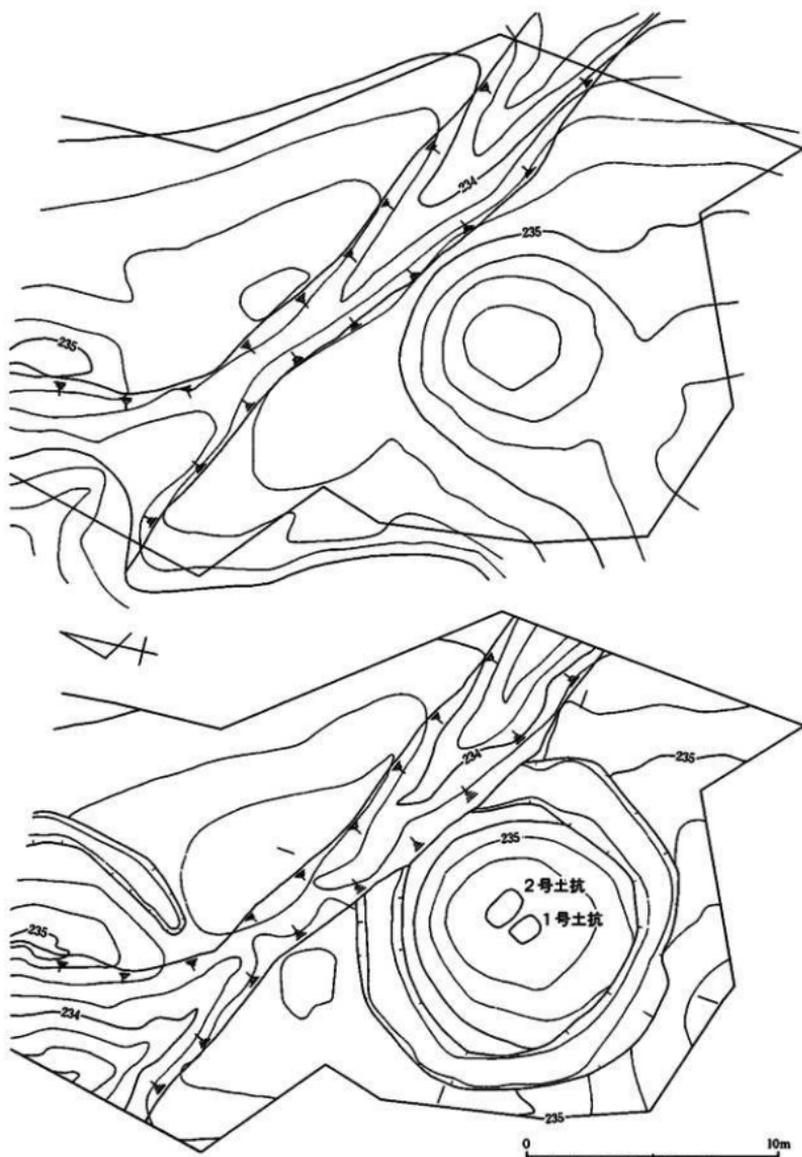
18は鉄鏃である。周溝の北東部埋土中からの出土である。一部欠損しており、現状では長さ5.5cm, 幅2.3cm, 重さ7.58gである。全体の形状からすると三角形鏃と思われる。

(4) 片野中山第12号古墳

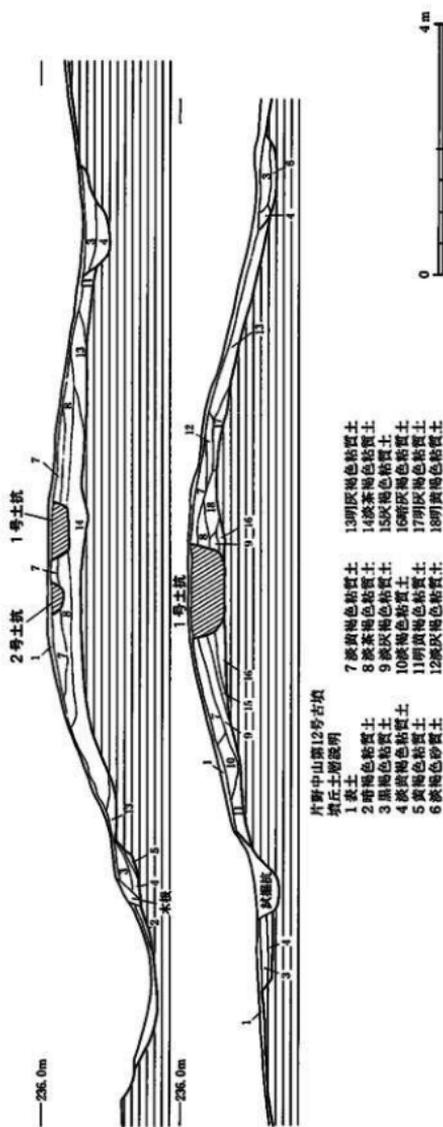
A 立地と現状 (第19図, 図版9a, 9b)

古墳は標高315mから北に深生する樹枝状の小さな尾根上(標高235.9m)に造られており、周辺の可耕地との標高差は54mである。現状は山林で、古墳のある尾根の両側は小さな谷状の地形となっている。北西側7mには第11号古墳が、東側35mには右谷遺跡が存在する。東西に枝分かれする尾根の付け根にあたり、片野中山古墳群の一支群を形成する片野中山第9～12号古墳内では最も南側(高所)に位置する古墳である。

古墳は北側にある幅3m, 深さ1m程の溝状の山道によって墳裾の一部を破壊されている。墳丘の高まりは表面観察でも容易に確認でき、墳丘の規模は直径約11m・高さ1mの円墳で、北側には幅1.5m程の周溝が巡っていると推定できた。



第19圖 片野中山第12号古墳地形測量圖 (上)・墳丘測量圖 (下) (1 : 200)



第20図 片野中山第12号古墳墳丘断面図(1:80)

B 墳丘(第19図, 図版10a, 10b)

調査は土層観察用の畦を古墳の中心部からほぼ東西南北に設定して、表土層の除去および周溝の検出を行った。表土は概ね0.1m程度であった。調査の結果、直径10m・高さ1.5mの円墳であることが判明した。

古墳は尾根の地形を利用して、周溝の掘削を行っている。周溝の幅は2.1~1.5m、深さ0.45mで一定していない。後世の改変により北側の周溝の一部が破壊されているが、ほぼ円形に全周していたと推定される。周溝の断面形は概ね逆台形状を呈している。南側周溝の埋土中から須恵器(第22図20)が出土している。

墳丘形成作業は周溝の掘削及びこの内側での平坦面の削出及びこの平坦面への盛り土からなる。平坦面は周溝の内側の凹凸を整地し、ここに盛り土を行っている。盛り土の厚さは墳頂部付近では約0.40mで、墳端部では0.20mほどである。盛り土は部分的には縮まっているところもあるが、概ね縮まりは弱い。

埋葬施設はこの盛り土の上面で確認した。

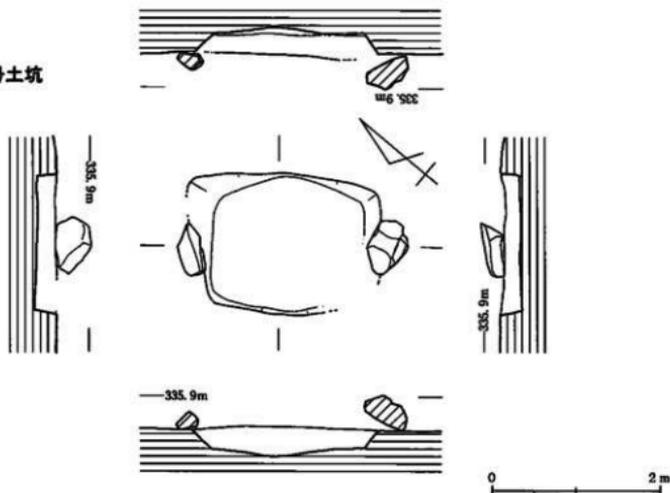
C 埋葬施設(第21図, 図版10c, 11)

墳丘中央部で並列に軸線をほぼ同じくして配置された2基の埋葬施設を確認した。墳丘中央部から南側にある埋葬施設を1号土坑、北側の埋葬施設を2号土坑とした。

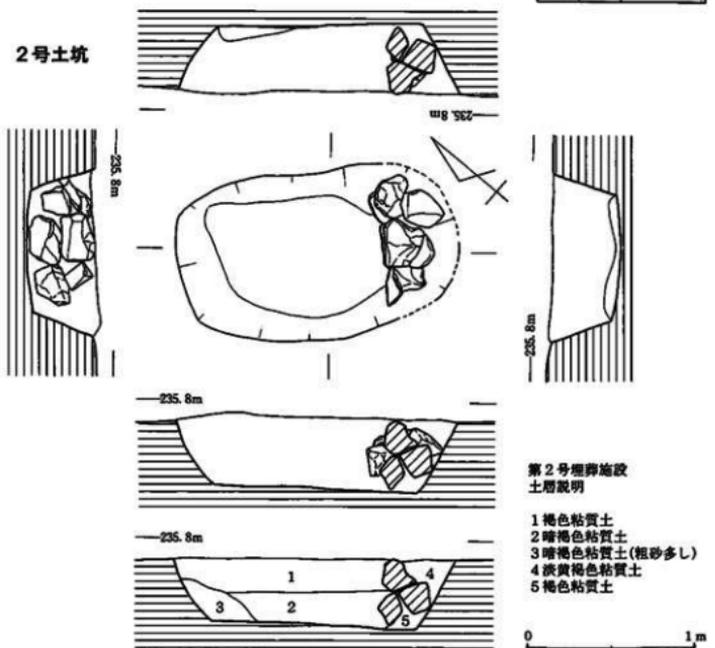
a 1号土坑(第21図, 図版11b)

古墳の中央部からやや南側に存在する土坑である。長さ1.10m、幅0.85m、深

1号土坑



2号土坑



第2号埋葬施設
土層説明

- 1 褐色粘質土
- 2 暗褐色粘質土
- 3 暗褐色粘質土(粗砂多シ)
- 4 淡黄褐色粘質土
- 5 褐色粘質土

第21圖 片野中山第12号古墳埋葬施設実測図 (1:30)

さ0.16mの長方形を呈しており、短辺側の両端に人頭大の角礫を置き、礫の広口面を短辺側と同一方向に合わせている。礫の底面レベルはほぼ同じである。これらの礫は位置関係から木棺の短辺（小口）側の押さえと推定できる。なお、長軸の方位はN40° Wである。

土坑内からは遺物は出土していない。

b 2号土坑（第21図、図11c）

古墳の中央部からやや北側に存在する土坑である。1号土坑とほぼ同じ長軸方向のN39° 30' Wで、北側に約1m程離れている。

土坑の東側短辺に人頭大の礫を2段ほど積んでいる。石積みの高さは0.75m、高さは0.40mである。内側の面が揃うように積んでいる。床面の規模は長さ1.02m、幅0.72mである。石組みを除去した堀方の規模は長さ1.67m、幅1.00m、深さ0.46mとなっている。このような石積み状況から木棺が埋葬してあったと推定できる。

坑内から遺物は出土しなかった。

D 出土遺物

土器（第22図、図版12）

19は土師器碗の口縁部である。周溝北東側の埋土中から出土した。復元口径12.7cmである。若干内湾しながら上方に立ち上がり口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。

20は須恵器壺の頸部から口縁部である。周溝南東側の埋土中から出土した。復元口径15.8cmである。口縁部は頸部から緩く折れて外側斜め上方に外湾気味に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は尖り気味に収めている。口縁部外面は外側に若干拡張され、端面をなしている。端面は中央部が少し凹んでいる。頸部上面にはカキメが巡っている。内面は回転ナデである。

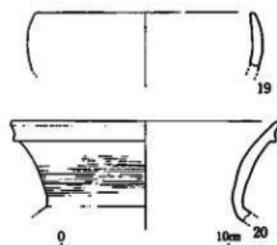
E 調査区内出土遺物

調査区内から古墳と分離した状態で遺物が出土している。

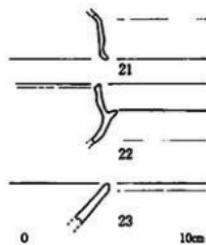
土器（第23図、図版12）

21・22・23はいずれも須恵器である。20は杯蓋口縁部片である。天井部との境に屈折部を持つ。口縁はほぼ垂直に延びて口縁端部にいたる。端部付近で若干外側に広がる。口縁端部は尖り気味におさめている。

22は杯身口縁部片である。体部は緩やかな弧を描いて受け部にいたる。受け部は水平に外側に延びて断面三角形となる。口縁部は受け部から若干内側に傾きつつほぼ垂直に真っ直ぐ延びて口縁端部



第22図 片野中山第12号古墳出土遺物実測図（1：3）



第23図 片野中山第9～12号古墳調査区内出土遺物実測図（1：3）

にいたる。口縁端部は角張気味におさめている。

23は器種の特定は出来ないが口縁部片である。外側斜め上方に真っ直ぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は角張気味におさめている。

(5) 右谷遺跡

A 検出遺構

a 住居跡

SB1 (第25図, 図版13c)

調査区の中央部南側のSX1から南約2mに位置し大半は調査区外となっている。北側の遺存状況がよく、床面までの深さは0.62m、南側の調査区境では0.40mであった。

住居跡の平面形はやや歪な隅丸方形で現存長は4.5m×2.6m、深さ0.40mである。床面はほぼ平坦である。壁溝が2条存在する。内側の壁溝は幅0.30m、深さ0.12mで、外側の壁溝は幅0.32m、深さ0.10mである。土層観察では内側の壁溝から外側の壁溝へと拡張が確認できた。

最初の時期の住居跡は一辺が4m、次の時期の住居跡は一辺が5m程度と推定できるが、遺構の大半が調査区外のため、不明な部分が多い。

南側の調査区際0.70×0.40mの範囲で焼土が認められた。

遺物は床面よりも0.1~0.2m程浮いた状態で土師器(第28図1・2)や須恵器(第28図3・4・5・8)が出土している。

b 土坑

SK1 (第26図, 図版14a・14b)

調査区の北東側の斜面に存在する。SK2から東へ3.6m、SK3から北東へ7.8mのところに位置している。遺構の北側半分は確認調査時に少し破壊されていた。

遺構は北から南へ下る斜面にあり、大きさは0.41×0.40mのほぼ円形で、深さは0.20mであった。この土坑のほぼ中央に須恵器壺(第28図13)を設置し、壺の口の上に須恵器杯身(第28図14)を裏返して蓋をしている。さらにこの須恵器杯身の上に20×18×10cm(縦×横×厚さ)の扁平な石材で覆っていた。

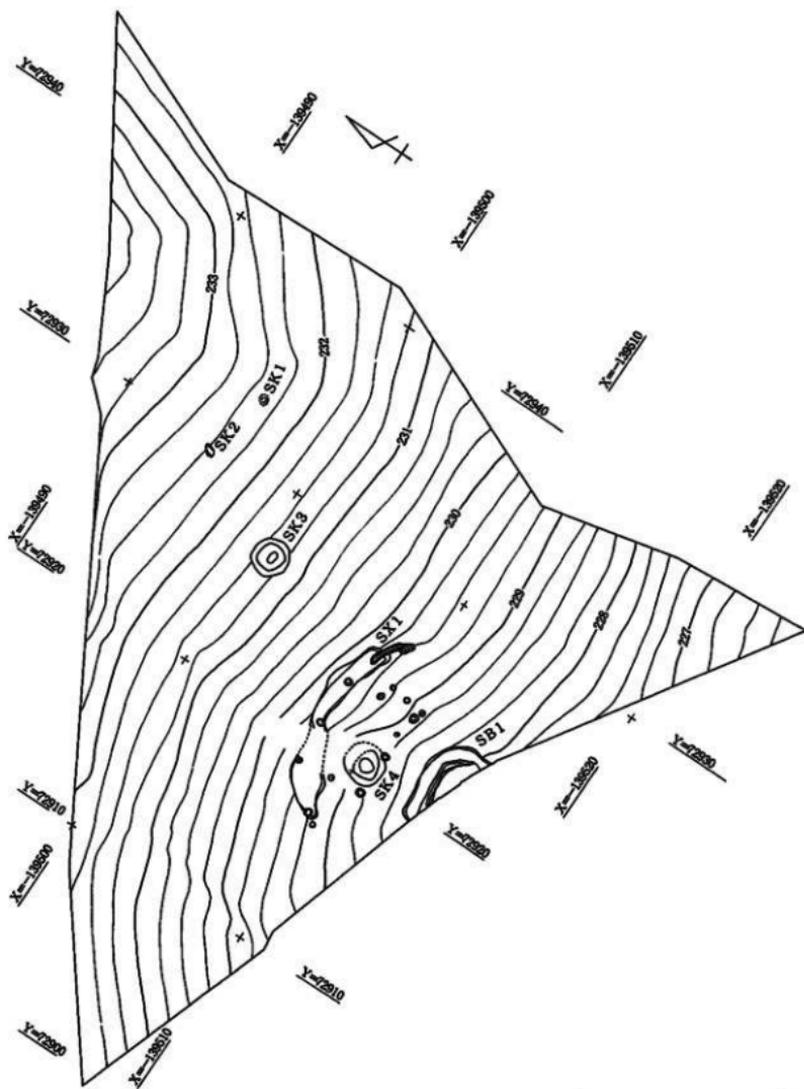
須恵器壺(第28図13)の中から人骨(火葬骨)が出土したので、土坑は骨蔵器を入れた墓と思われる。また、石材は壺と杯身を厳重に封印しかつ現地表面からそれほど深くないところから見つかっていることなどから墓標としての可能性も考えられよう。

SK2 (第26図)

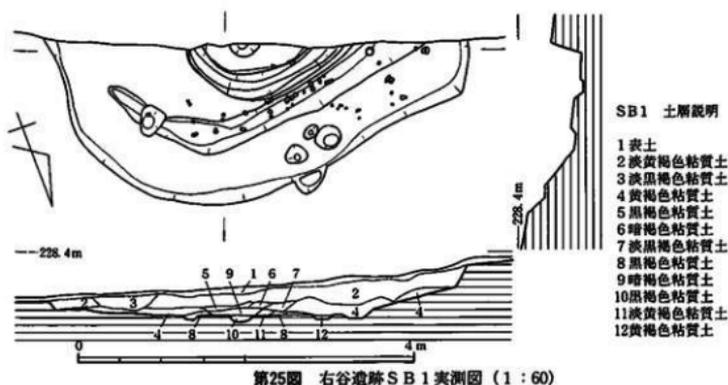
調査区の北西側の斜面上に存在する。SK1から西へ3.6m、SK3から北東へ6.2mの所に位置している。規模は0.66×0.35m、深さ0.10~0.06mで、平面形は少し歪な楕円形をしている。遺構の中央部からやや南側に径0.35cmのほぼ円形の焼土が広がっている。厚いところで0.07mほどが赤変していた。弥生土器(第28図12)が上面から出土しているが、流れ込みの可能性が高い。

SK3 (第26図, 図版14c)

調査区の中央部の斜面上に存在する。SK2から南西へ6.2m、SX1から北へ7mの所に位置している。上面の規模は1.84×1.94m、深さ1.47mで、平面形は少し歪であるが概ね円形をしている。底面は0.60×0.40mの楕円形で、平坦である。上面に比べると底面が極端に狭くなって



第24圖 右谷道跡遺構配置圖 (1 : 250)



いる。また、土層断面を観察すると、土坑の2/3ぐらいの高さにある傾斜が変換する所(深さ0.60mの所)で、土層の堆積に違いが認められることから、傾斜が変換する場所で再び利用された可能性も存在する。

SK4 (第26図, 図版15a・15b)

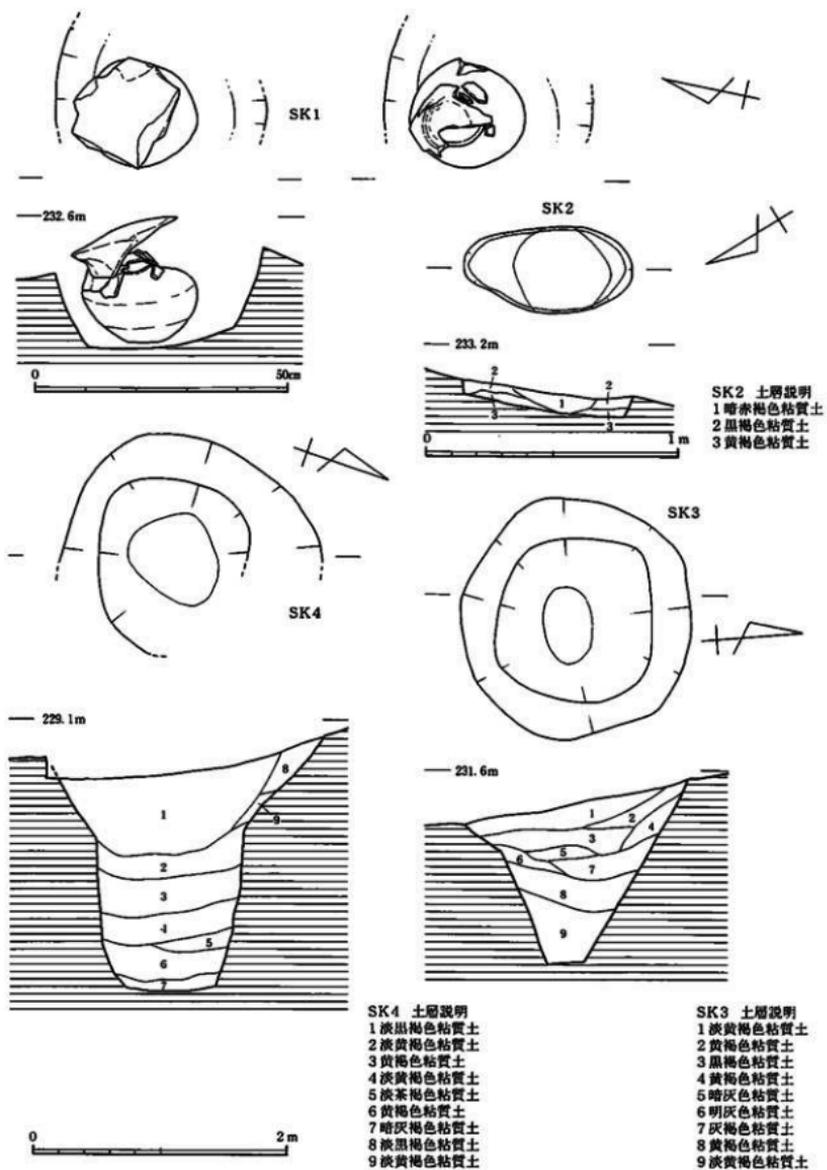
調査区の中央部南側斜面に存在する。SX1と重なり、SB1から北へ1.7mの所に位置している。確認調査時に遺構の東側約1/2を破壊されている。上面の規模は2.05×2.15m、深さ2mで、平面形は円形をしていたと思われる。坑底面の規模は0.78×65mで、概ね平らである。土坑の上端から2/3ほど下がったところ(深さ0.72cm)から垂直気味に坑底面に続いている。坑底面からは湧水が確認できた。この湧水は調査中の夏でも枯れなかったことから、あるいは本遺構が水に関係する何らかの施設(例えば井戸)であった可能性もある。遺物は出土していない。また、SX1に伴うと思われる柱穴により破壊されていることから少なくともSX1より先に存在しており、SX1ができた時には既に埋没していた可能性が強い。

c 性格不明遺構

SX1 (第27図, 図版15c)

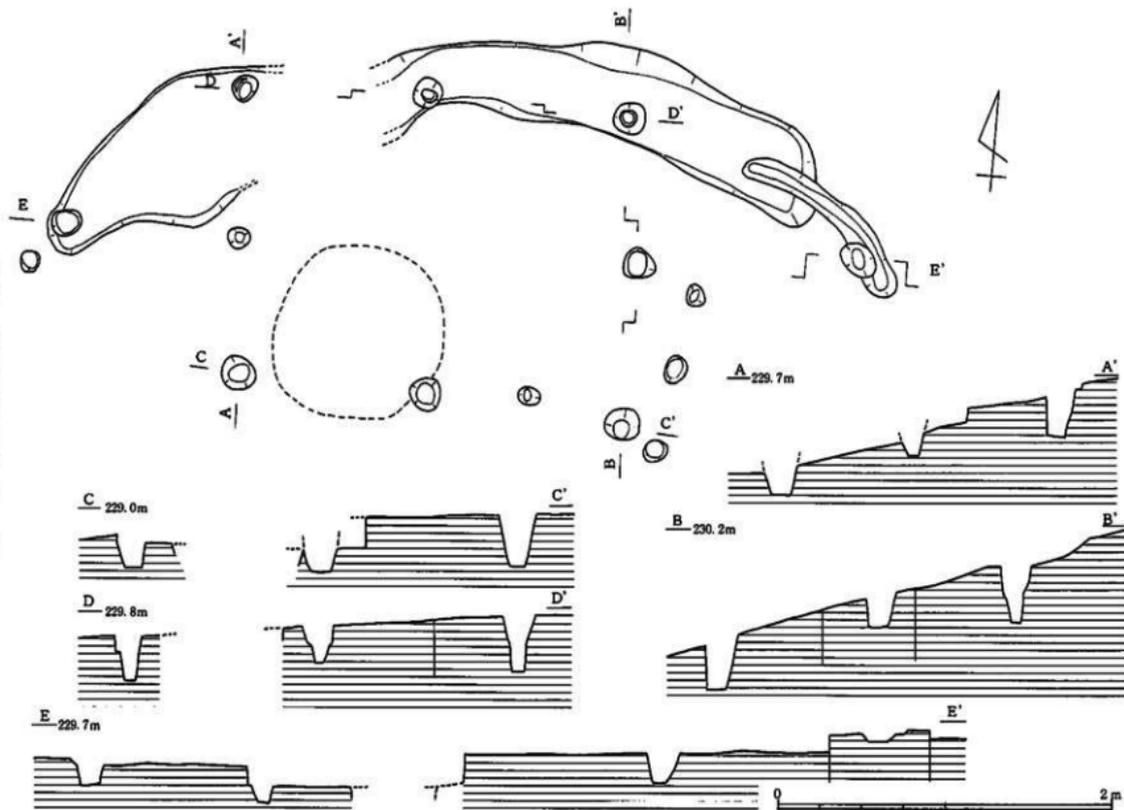
調査区の中央部の南側斜面上に存在する。SK3から南へ7m、SB1から北へ2mの所に位置している。溝状の遺構及びその周辺に存在する柱穴群からなる。

溝の規模は幅1.6~0.65m、長さ10.7mで、北側の遺存状況の良い所からの深さは0.32mである。柱穴群の規模は2間×2間(東西4.6m×南北3.7m)で、東西の中央部にさらに1間分のびる(西側2.1m、東側2.6m)柱穴が存在する。



第26圖 右谷遺跡SK1~SK4実測図 (1:10, 1:20, 1:40)

第27圖 右谷壩跡S X 1 案測圖 (1 : 50)



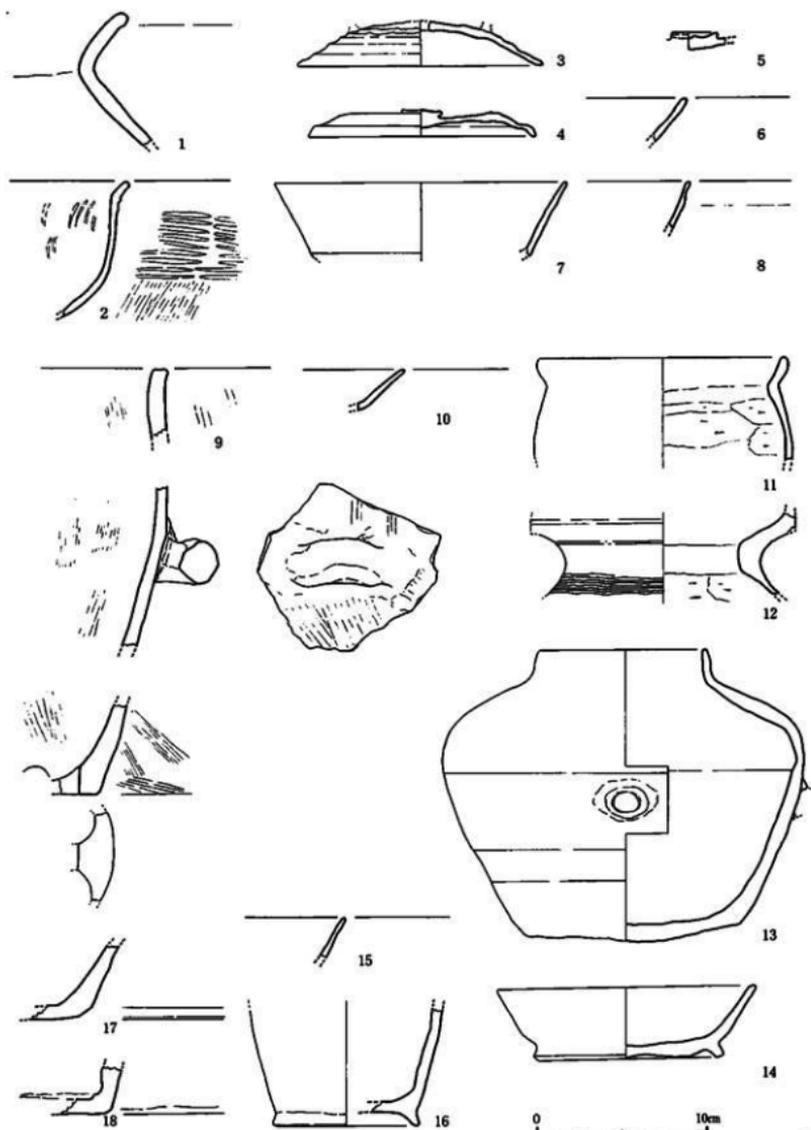
各柱穴の規模はP1が径0.30×0.28m、深さ0.52m、P2が径0.36m、深さ0.44m、P3が径0.38m、深さ0.68m、P4が径0.28m、深さ0.20m、P5が径0.40×0.37m、深さ0.41m、P6が径0.38×0.32m、深さ0.33m、P7が径0.40m、深さ0.25m、P8が径0.42m、深さ0.61m、P9が径0.38×0.32m、深さ0.22m、P10が径0.54×0.45m、深さ0.10mである。また、各柱穴間の距離はP1-P3が4.6m (P1-P2:2.2m, P2-P3:2.4m)、P9-P10が9.5m (P9-P4:2.1m, P4-P5:4.3m, P5-P10:3.1m)、P6-P8が4.7m (P6-P7:2.3m, P7-P8:2.4m)、P1-P6が3.3m (P1-P4:1.7m, P4-P6:1.6m)、P2-P7が3.5m、P3-P8が3.6m (P3-P5:1.7m, P5-P8:1.9m)である。主軸方位はN91°Wである。溝状遺構及び周辺から遺物が若干出土している。

B 出土遺物

検出した遺構から土師器・須恵器・石器が出土している。

a 土器 (第28図・図版16)

1～8はSB1から出土した土師器(1・2)・須恵器(3～8)である。1は甕形土師の胴部上半～口縁部片である。頸部はく字形に屈折する。口縁部は斜め上外方にほぼ真っ直ぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。遺存状況が悪いので調整等は不明である。色調は黄褐色で、焼成は普通である。2は碗形土師の底部上半～口縁部片である。底部は丸底と思われる。体部は下半で円弧を描きながら屈曲し、口縁部はほぼ真っ直ぐに延びて、口縁部付近で緩く外側斜め上方に如意型に屈曲する。端部はやや角張気味におさめている。外面は体部下半が斜め方向の平行叩き、体部上半～口縁部は平行叩き、口縁部は横方向のナデである。内面は口縁部付近が横方向のナデ、体部は同心円の叩き目をナデ消している。色調は淡黄褐色で、焼成はやや甘い。3は蓋である。復元口径は14.4cm、器高は2.6cmである。天井部はわずかに丸みを持ち、体部との境に高台が付いていたと思われる。体部は外側下方に緩やかに八字形に真っ直ぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。天井部外面はヘラ削り後回転ナデである。その他は回転ナデで、天井部内面中央に定方向のナデがある。色調は淡青灰色で、焼成は良好である。4・5は杯蓋である。4は天井部～口縁部である。口径は13.4cm、器高は1.7cm、つまみ径は3.4cm、つまみ高は0.6cmである。天井部外面のほぼ中央に扁平なボタン状のつまみが付く。天井部はほぼ平らである。体部との境で斜め外方に八字形に緩く屈折して口縁部にいたる。口縁部は端部付近で垂直方向に短く屈曲する。口縁端部は丸くおさめている。つまみはナデ、それ以外は回転ナデである。色調は淡青白色で、焼成はよい。5は天井部のつまみ部分である。つまみ径2.7cm、つまみ高は0.4cmである。ボタン状の扁平なつまみである。外面はナデで、内面は回転ナデ、つまみ中央部に定方向のナデがある。色調は淡青白色で、焼成は良好である。6～8は杯身である。6は口縁部片である。外側に緩く真っ直ぐ伸びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。調整は回転ナデである。色調は淡青灰色で、焼成は普通である。7は体部～口縁部である。復元



第28圖 右谷遺跡出土遺物実測図 (1) (1 : 3)

口径は17.8cmである。底部境で上方に屈曲し、真っ直ぐ斜め上方に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。調整は回転ナデである。色調は淡青白色で、焼成は良好である。高坏の可能性もある。8は口縁部片である。垂直気味に外側斜め上方に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。調整は回転ナデである。色調は淡青灰色で、焼成は普通である。

9～11はSX1から出土している。11は弥生土器、9は土師器で、10は須恵器である。9は甑である。底部は平底で、円形の穿孔が複数存在する。胴部中から少し上に把手が付く。高さは3.0cm、孔の大きさは2.6×1.5cmである。口縁部は若干外反しつつほぼ垂直に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は角張って、端面となっている。調整は内外面共にハケメである。口縁端部付近はヨコナデである。色調は黄褐色で、焼成は普通で、遺存状況がやや不良である。11は甕の胴部～口縁部である。復元口径は14.0cmである。頸部はわずかにく字形に緩く屈曲する。口縁部は内傾気味に外側斜め上方に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。外面にススが付着している。口縁部内面はヨコナデ、頸部はナデで、胴部上半はヘラ削り後なでている。10は皿の口縁部片である。体部は八字形に外側斜め上方に真っ直ぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部はやや尖り気味におさめている。調整は回転ナデである。色調は淡青白色で、焼成は普通である。

13～14はSK1から出土した須恵器である。13は壺のほぼ完形品である。口径は9.0cm、器高は22.4cm、底部径は12.5cm、胴部径は21.2cmである。最大胴部径の少し下に把手が2カ所対向するように付くと思われるが、いずれも接合部から欠失している。底部は概ね平底である。胴部は割と急に外側斜め上方に立ち上がる。最大胴部付近で内側に緩やかな円弧を描きながら屈曲して、頸部にいたる。頸部は外側に屈曲して、ほぼ垂直に短く立ち上がって口縁端部にいたる。口縁端部はやや尖り気味におさめている。底部外面はヘラ削り後ナデ、胴部から口縁部は回転ナデで、底部内面は定方向のナデである。色調は淡青灰色、焼成は普通である。14は杯身のほぼ完形品である。13の上に上下逆にして蓋として乗っていた。口径は14.6cm、器高は4.3cm、底部径は10.3cm、高台高0.9cmである。底部は平底である。体部との境に断面台形状の高台が付く。体部は緩やかに外側上方に延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。底部外面はヘラオコシのままで、高台部分は横ナデである。体部からは回転ナデで、底部内面に定方向のナデが施される。遺存状況はやや不良である。色調は淡青白色で、焼成はやや甘い。

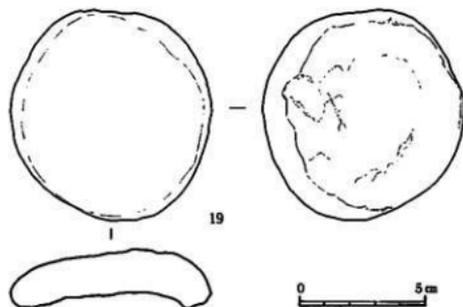
12はSK2から出土した弥生土器である。壺形土器の頸部である。復元頸部径は11.4cmである。く字形に屈曲する部分に当たる。頸部からはほぼ垂直立ち上がる口縁部が少し残っている。外面頸部下半にはハケメ、頸部上半はナデで、口縁部外面にはハケメが施されている。内面は頸部上半はヨコナデ、屈曲部はナデで、頸部下半はヘラ削りである。保存状況は不良である。色調は淡黒褐色で、焼成は普通である。

15～18は調査区内から出土した遺構には伴わない土器である。いずれも須恵器である。15は杯身の口縁部片である。斜め上方に真っ直ぐ延びて口縁端部にいたる。口縁端部は丸くおさめている。調整は回転ナデである。色調は淡青白色で、焼成は良好である。

16～18は壺の底部である。16は底部～胴部下半である。復元底径は8.6cmで、高台高は0.8cmである。底部は平底で、断面が台形状の高台が胴部との境に巡る。高台の端部は若干角張気味におさめている。胴部は若干外側に広がりつつほぼ垂直方向に延びる。高台部分はナデで、この他は回転ナデである。色調は淡青灰色で、焼成は良好である。

17・18は底部片である。17は平底で、胴部はハ字形に外側斜め上方に真っ直ぐ延びる。底部外面はヘラ切りで、胴部境から底部付近はヘラ削りが残っている。底部よりやや上からヨコナデである。内面はヨコナデである。色調は淡黒褐色で、焼成は良好である。

18は平底で、胴部はほぼ垂直に立ち上がっている。底部外面はヘラ削りで、胴部はヨコナデ、内面はヨコナデである。色調は淡青灰色で、焼成は良好である。



第29図 右谷遺跡出土遺物実測図(2) (1:2)

石器 (第29図・図版28)

19はS B 1 から出土した磨石である。凹面の一部に捺痕がある。8.5×8.0cmのほぼ円形で、厚さは1.7cm、重さは182.3gあった。

6 ま と め

(1) 片野中山第9～12号古墳

今回調査を実施した片野中山第9～12号古墳は15基からなる片野中山古墳群の一部である。ここでは本古墳群の特徴及び時期について考察しまとめとする。

立地と規模

古墳群は幅の狭い尾根に築造された円墳からなる。円墳の規模も概ね10m前後で、古墳の高さは第9号が1m未満の低墳丘である。これに対して第10～12号古墳は墳丘の規模は同程度であるが、古墳の高さは1m以上あり、第9号古墳の周溝が埋没しているにしても相対的に高い。

同一の丘陵尾根上に築造された古墳の間での規模の差は被葬者の性格の反映あるいは時期差を示している可能性も存在する。ただし、墳形・規模に関して顕著な違いは見いだし得ない。

埋葬施設

墳丘の2/3が土取り等で消失していた第11号古墳は埋葬施設を発見できなかったが、第9号古墳・第10号古墳・第12号古墳で埋葬施設を検出した。このうち第9号古墳と第10号古墳は墳丘の中央部付近に埋葬施設（土坑）が1基存在する。対して第12号古墳は長軸を同じくして埋葬施設（土坑）2基が併置されている。

埋葬施設の構造は第9号古墳が土坑であった。土層断面の観察でも木棺の痕跡は確認できなかった。ただし、土坑規格は平面形が長方形であることから木棺が存在した可能性もある。

第10号古墳は埋葬施設は二重土坑となっており、外側の掘方は楕円形にちかく、内側の掘方は長方形であった。しかも内側掘方の短辺の両側には拳大から人頭大の礫を内側に沿うように並べていた。現地表面近くにあったので、その一部は移動している可能性は否定できないが、これらの礫は基標であった可能性もある。木棺痕跡は検出できなかったが、鉄製刀子の出土状態からすれば、何らかの外装施設があってその外表の上面もしくは側面に副葬された可能性が強いことから、内側の長方形の掘方内には木棺が据えられていたと想定できる。この石列は木棺の小口側を押さえる目的もあったと思われる。

第12号古墳の埋葬施設は墳丘中央部に並列して検出した2基の土坑である。1号土坑は長方形の土坑の両短辺側に人頭大の角礫を配置している。この角礫は位置等からすれば木棺の押さえであった可能性が強い。他の古墳の埋葬施設同様に木棺である可能性は高いが、木棺の構造については不明である。

次に2号土坑は長方形で、東側短辺の内側に面を揃えるように石材を列べて積んでいた。反対側の短辺では石列は確認できなかったが、石積み状況等を考慮すれば、土坑の内部に木棺が埋没されていた可能性は高い。

以上各古墳の埋葬施設についてみてみると大まかには、①墳丘の中央部に一基ないしは二基で構成される、②埋葬施設の構造は直葬もしくは木棺が想定できる、③副葬遺物は皆無もしくはあったとしても僅少で鉄器である、などの特徴が挙げられる。

これらの事例を整理すると埋葬施設に関しては規模の違いが存在するものの、すべて土坑を基本としており、副葬品等からも均質的あるいは等質的である。

時期について

埋葬施設からは時期を明確に示すような副葬品が見あたらないので、周溝やあるいは墳丘周辺から出土した資料で推測する。

第9号古墳は周溝底面から須恵器が出土しており、この須恵器は杯蓋の段が明瞭で、口縁部が尖り気味で小さな端面となっている。また、杯身は反りが短く、立ち上がりは比較的長く、端部はやや角張っている。このような特長からこれらの須恵器はおおむね5世紀末～6世紀初頭頃と推定できる。

第10号古墳では墳丘内表土から須恵器が出土している。この須恵器は埋葬施設とは分離しており、直接古墳の築造年代を示すわけではないが、概ね5世紀末～6世紀初頭と思われる。

第11号古墳は周溝内の埋土中から遺物が出土している。これらの遺物は直接本古墳の築造時期を示すものではないかもしれないが、その特徴等から6世紀初頭頃と思われる。

第12号古墳でも周溝内から遺物が出土しているが、これらの遺物は5世紀末～6世紀初頭頃と思われる。

いずれにしても、第9～12号古墳の造営時期を直接示す遺物は出土していない。唯一、非常に間接的ではあるが、第9号古墳の周溝底面に密着するかたちで出土した須恵器により、第9号古墳が少なくとも5世紀末頃～6世紀初頭頃であることが判明した。

以上をまとめると古墳の時期については推定の域を出ないが、概ね5世紀代におさまりそうである。ただし、個々の古墳の造営の順番については不明といわざるをえないが、造営条件の良い場所から古墳の構築が始まると仮定すれば、第12号古墳から第9号古墳へとすなわち南側の尾根の比較的平坦な場所から北側の斜面へとの移り変わりを想定可能である。

結語

今回の調査では古墳群を形成する群構成の最小単位となる一つの支群を調査した。これらの古墳は時期については厳密にできなかったが、各古墳はその内容は少しずつ違っているものの均一的である。このようなあり方は5世紀末～6世紀前半にかけて三次地方で造営された小型の古墳を主体として構成される古墳群の多くに見ることができる。このような均質化は古墳を形成する人々の拡散の象徴ともいえ、当時の社会構成の一部を反映しているとも言える。直葬タイプの埋葬施設から横穴式石室へという埋葬施設の変遷を考慮すれば、今回の調査ではその最盛期から横穴式石室導入直前頃の状況を示していると思われ、個人から特定の人々の集団へと埋葬意識の転化の素地がすでにこの段階で出現しているといえるのではないだろうか。

(2) 右谷遺跡

遺跡は尾根の斜面に立地する古代の遺跡である。ここでは遺跡の年代や遺構の性格について検討してまとめたい。

遺構は竪穴住居跡、火葬墓、土坑、性格不明遺構である。時期の判別する遺構は竪穴住居跡（7世紀末～8世紀前半頃）と火葬墓（8世紀末～9世紀初め頃）がある。

竪穴住居跡は大半が調査区外のため詳細は不明である。立地としては小さな谷状の地形の斜面部にあたり、条件的には良いとは思えず、尾根の頂部を意図的に避けているような占地である。このことは本遺跡の西側に形成された片野中山第9～12号古墳の存在をある程度意識していたことを窺わせる。ただし、今のところ単独で、遺跡内では同時期の遺構が他に存在しないことから、この竪穴住居跡が住居であったかどうかは不明である。農耕あるいは狩猟などに使う常設の簡易な小屋であった可能性も存在する。

遺跡の南東側の斜面上に存在するSX1は弓状の緩い溝を持つ掘立柱建物跡である。掘立柱建物跡の規模は2間×2間で桁行中央部（棟木）に妻から伸びる1間分の柱穴を確認した。東側の柱穴は柱筋が北にずれてやや浅いので伴わない可能性もあるが、西側の柱穴は棟木にほぼ並び、掘立柱建物跡の他の柱穴と同程度の深さであることなどから、西側に1間分延びた柱穴は掘立柱建物跡に伴う柱穴と考えても良さそうである。

桁行き方向に伸びる1間分の柱穴を掘立柱建物跡に伴うと考えた場合、この柱穴は棟持柱に伴う柱穴と解釈することが可能である。通常の独立棟持柱は、建物跡のほぼ中央部（棟）に当たる部分の延長線上にあり、かつ妻側の隅柱を結んだ線の外側に存在する。さらに棟持柱を設置する柱穴は建物跡の妻側からの距離が離れているものもあれば近接しているものもある。すなわち、独立棟持柱を有する掘立柱建物跡の最低限のパーツの構成は柱穴が6で、その平面形態が亀甲形であれば成立可能となる。加えて、多くの場合は梁間の1間分の距離が桁行の1間分の距離に比べて長くなる事例が多く、さらに時期的な変遷と共に梁間は一定以上の間隔よりも広くはならないが、かわりに桁行きが延びる傾向が指摘されている。

このような独立棟持柱を持つ建物跡とSX1を比べると、棟持柱を含まないベースとなる掘立柱建物跡は4.5×3.5mと桁行きが梁間よりも長いものの、平面形態は方形に近くなっている。しかも梁間方向の中央部にも柱穴を持っており、梁間方向中央部の柱穴を有さないものに比べると変則的である。

独立棟持柱を持つ建物跡の性格については種々論じられているが、床が建物のどの位置にあったのかが先ずははっきりしない。さらに判明したとしても、住居であったのか、倉庫であったのか、祭祀的な施設であったのかいずれも明確に出来ない。これらが組み合わせられている可能性も否定できない。遺構とその性格や評価は別の次元の問題であって、柱穴の形態や並びの特徴から判断できる状況ではない。

ここで建物の棟方向についてみると、若干北西側にずれるもののほぼ等高線に平行する。そうなると建物の高さ如何によっては遺跡の南東側以外では見えなくなる場合がある。すなわち

高さが少なくとも3m以上はないと周辺の可耕地からは全く見えないのである。

時期を確定できないが、仮に火葬墓（SK1）と同時期であるとすれば、この建物跡がこの墳墓に関係する遺構である可能性も存在する。その場合には、例えば何らかの祭祀を行う場としての性格も考慮する必要も出てこよう。類例の増加を待ちたい。

次に、遺跡の北東側斜面で検出したSK1については壺の中に火葬骨が入っていたことから火葬墓と断定できる。

遺構の構造は火葬骨を須恵器の壺に納めて、これを同じく須恵器の杯身を上下に反転させ蓋として転用し、壺の口縁部を被覆する。そしておそらくはこの時点であらかじめ壺がおさまるように掘っていた土坑に須恵器（壺と杯身のセット）を安置し、墓穴掘削時の排土で須恵器を埋め、蓋の上面（高台底部）と埋め土の高さが概ね揃うと蓋の上に一辺0.20mほどのやや厚みのある亜角礫を乗せて、この亜角礫の上面が目視できる程度までさらに土を被せたと思われる。

整理すると、地中に穿たれた円形の土坑は墓穴、そして須恵器壺と須恵器杯身は骨蔵器、また最後に乗せた亜角礫は墓標石に当たる。他には遺構や遺物は検出できなかったため、火葬墓に係る構成要素は墓坑＋骨蔵器＋墓標石となっている。

県内で検出された骨蔵器についてはSK1のように土坑内に安置するものと横穴式石室内に安置するものがあり、横穴式石室利用のものに比べると土坑埋納例の方が数としては多い。さらに土坑埋納例では素掘の土坑にそのまま埋納するタイプと土坑の周りを石で囲って埋納するタイプが存在する。素掘の土坑においても石のかわりに有機物で土坑の周りや骨蔵器を囲った可能性はある。

SK1の場合、埋納された場所が古墳群の占有空間の周囲にあり、埋納された時間に数百年の間隔がある。前述した古墳群でも古墳の墳丘外に土器棺が存在することなどから、ある程度この場所が墓地として認識されていた可能性が窺える。これらのことを勘案すると、火葬墓の被葬者は前述した片野中山古墳群を形成した集団と何らかの関係を持つ人物の可能性もあろう。

以上、火葬墓と先行する古墳群の関係や棟持柱をもつと思われる掘立柱建物跡とその構造などについて若干の検討を行った。右谷遺跡の調査は面積は狭かったもののそこで検出した遺構には興味深いものがある。

註

- (1) 恵谷泰典「骨蔵器考 ー広島県における調査例を中心にー」『山口大学考古学論集』2003年

版 图



a 空中写真
(左から右へ
第9～12号)



b 第9～11号古墳近景
(西から)



c 第10～12号古墳近景
(西から)





a 第9号古墳調査前
(北から)



b 第9号古墳調査前
(東から)



c 第9号古墳土層断面
(西から)

片野中山第9号古墳

a 第9号古墳墳丘
(西から)



b 第9号古墳埋葬施設
(北から)



c 第9号古墳埋葬施設
遺物出土状況
(西から)





片野中山第9号古墳

a 第9号古墳周溝内出土遺物状況
(西から)



b SK1
(西から)



c SK2
(西から)

片野中山第10号古墳

a 第10号古墳調査前
(北から)b 第10号古墳調査前
(東から)c 第10号古墳周溝断面
(東から)



a 第10号古墳土層断面
(東から)



b 第10号古墳墳丘
(北から)



c 第10号古墳墳丘
(西から)

a 第10号古墳埋葬施設
検出状況（西から）



b 第10号古墳埋葬施設
（西から）



c 第10号古墳埋葬施設
遺物出土状況
（西から）





片野中山第11号古墳

a 第11号古墳調査前
(東から)



b 第11号古墳土層断面
(東から)



c 第11号古墳墳丘
(東から)

a 第12号古墳調査前
(北東から)



b 第12号古墳調査前
(北から)



c 第12号古墳周溝断面
(西から)





片野中山第12号古墳

a 第12号古墳墳丘
(北から)



b 第12号古墳墳丘
(東から)



c 第12号古墳埋葬施設
(西から)

a 第12号古墳1号・2号
埋葬施設（南から）

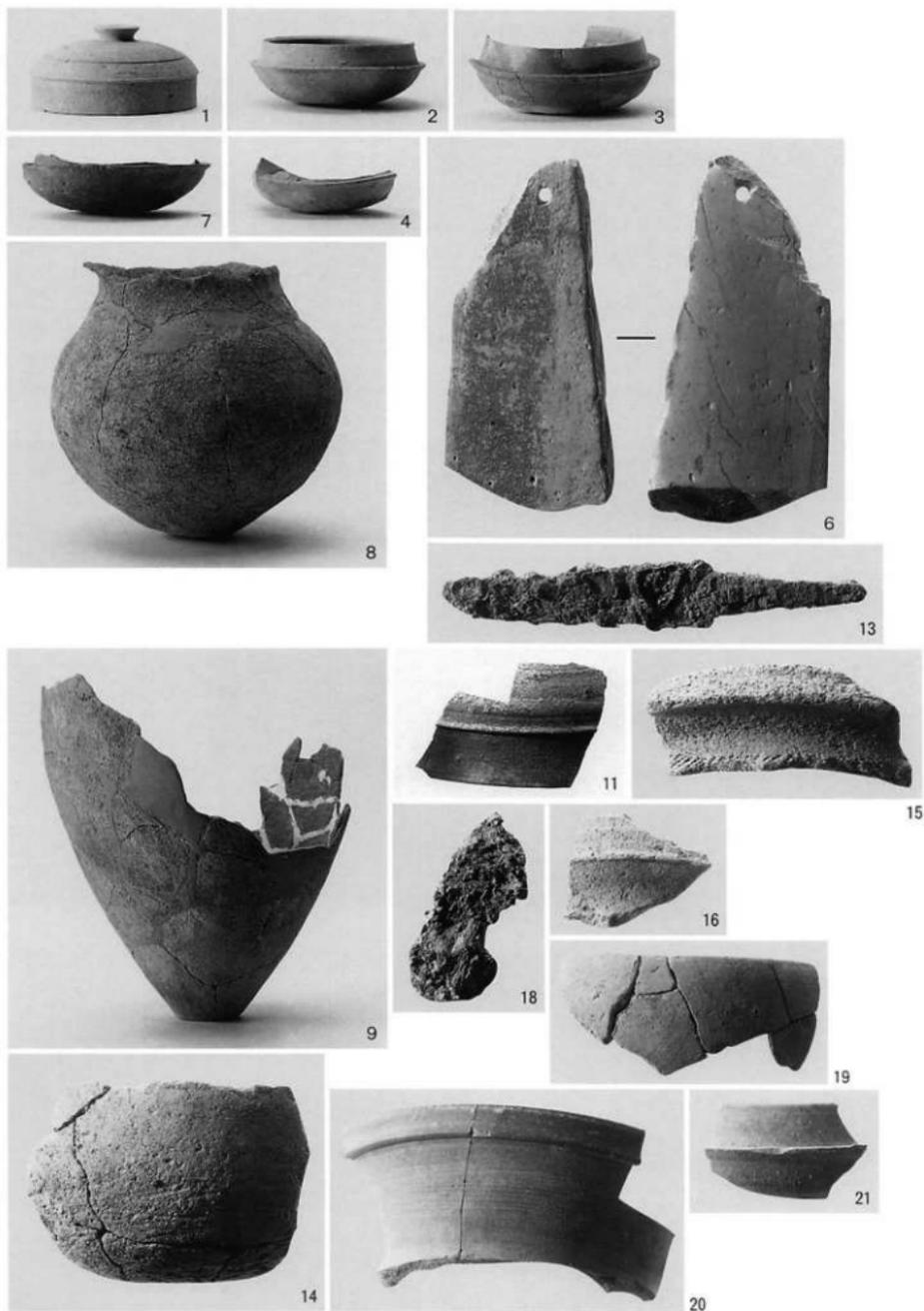


b 第12号古墳1号
埋葬施設（西から）



c 第12号古墳2号
埋葬施設（西から）





片野中山第9～12号古墳出土遺物

a 空中写真



b 遺跡遠景 (東から)



c SB1完掘 (東から)



右谷遺跡



a SK1 検出状況
(西から)



b SK1 (西から)



c SK3 完掘 (東から)

右谷遺跡

a SK4土層断面
(北東から)

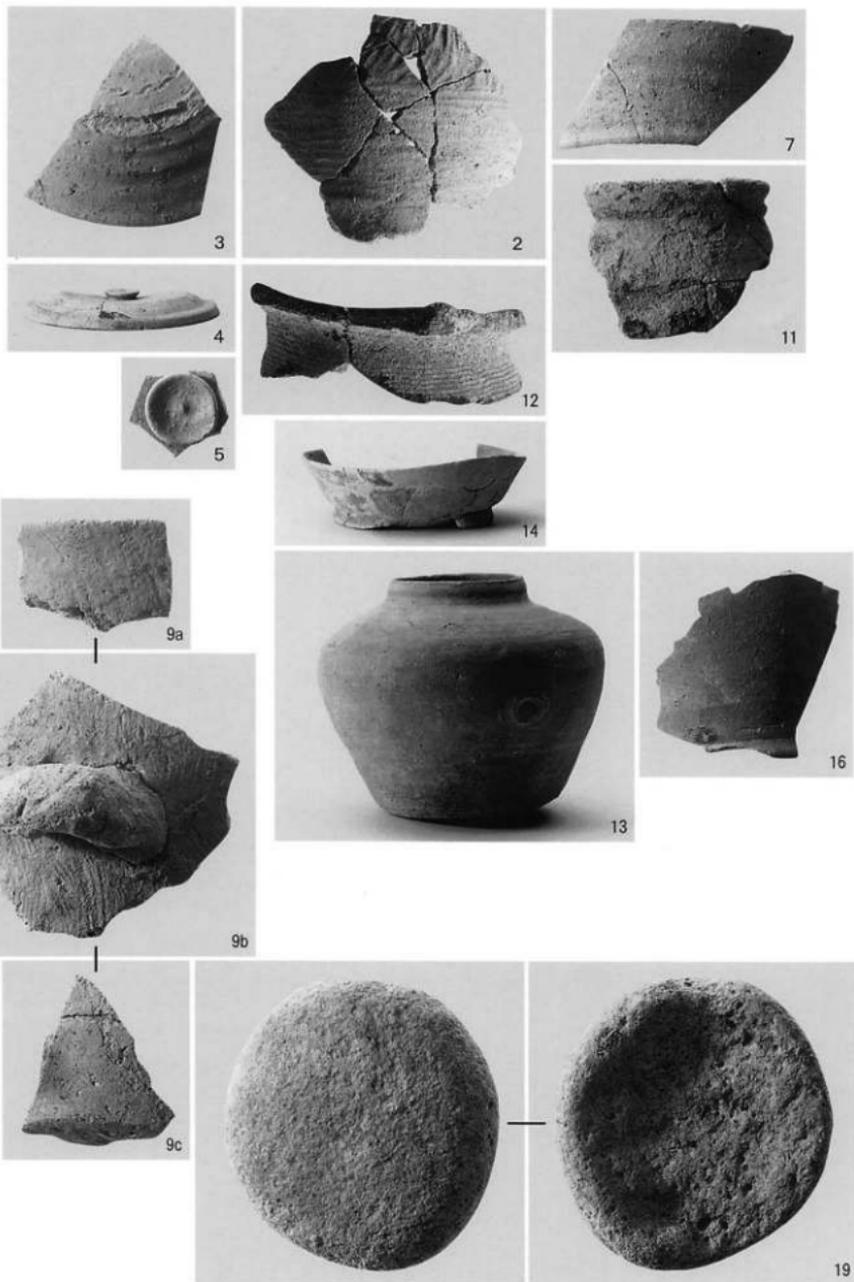


b SK4完掘
(北東から)



c SX1完掘
(南東から)





右谷遺跡出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ちゅうごくおうだんじどうしゃどうおのみちまつえせんけんせつじぎょうにともなうまいごうぶんかじはっくつちようさほうこく (18)							
番名	中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 (18)							
副番名	片野中山第9～12号古墳・右谷遺跡							
巻次	(18)							
シリーズ名	財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書							
シリーズ番号	第41集							
編著者名	辻 満久							
編集機関	財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室							
所在地	〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号 TEL082-295-5751							
発行年月日	2012年3月5日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
片野中山第9号古墳	広島県三次市 吉舎町敷地	34584	34584-60	34° 44′ 36″	132° 57′ 36″	20070416 ～ 20070808	310	記録保存 調査
片野中山第10号古墳	広島県三次市 吉舎町敷地	342584	34584-61	34° 44′ 36″	132° 57′ 36″	20070416 ～ 20070808	240	
片野中山第11号古墳	広島県三次市 吉舎町敷地	34584	34584-62	34° 44′ 36″	132° 57′ 36″	20070416 ～ 20070808	230	
片野中山第12号古墳	広島県三次市 吉舎町敷地	34584	34584-63	34° 44′ 56″	132° 57′ 13″	20070416 ～ 20070808	230	
右谷遺跡	広島県三次市 吉舎町敷地	34584	34584-397	34° 44′ 35″	132° 57′ 38″	20070416 ～ 20070808	800	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
片野中山第9号古墳	古墳	古墳	土坑墓 周溝		須恵器、石器		有孔石版	
片野中山第10号古墳	古墳	古墳	土坑墓 周溝		須恵器、鉄器			
片野中山第11号古墳	古墳	古墳	周溝		須恵器、鉄器			
片野中山第12号古墳	古墳	古墳	土坑墓 周溝		須恵器			
右谷遺跡	集落跡	古代	竪穴住居跡 火葬墓		土師器、須恵器		骨蔵器	

要約	<p>片野中山第9～12号古墳</p> <p>第9号古墳は直径9m、高さ1mの円墳で、幅1.8～1.2mの周溝が2/3周する。中央部に2.2m×1mの長方形の埋葬施設が一基存在する。埋葬施設からは有孔石製品が、また周溝底面から須恵器杯蓋杯身が出土した。この他墳丘外から土器棺蓋を検出した。古墳は出土遺物等から5世紀末～6世紀初頭頃の築造と思われる。第10号古墳は直径7.5m、高さ1mの円墳で、幅1.4～0.9mの周溝が1/2周する。中央部に2.8m×1.7mの二重土坑の埋葬施設が一基存在する。埋葬施設からは鉄製刀子が出土した。時期については5世紀末～6世紀初頭頃と思われる。第11号古墳は破壊され残存するのは約1/3である。墳丘の残存状況から直径10.5m、高さ1.2mの円墳で、幅1.3～0.8mの周溝が巡っていたと思われる。埋葬施設は検出出来なかった。周溝内から土師器・須恵器・鉄鏃が出土した。時期は5世紀末～6世紀初頭頃と思われる。第12号古墳は一部破壊されているが、直径10m、高さ1.5mの円墳で、幅2.1～1.5mの周溝が全周したと思われる。中央部に埋葬施設が二基存在する。周溝内からは須恵器が出土した。時期については5世紀末～6世紀初頭頃と思われる。</p>
右谷遺跡	<p>尾根の東側の斜面上に立地する。古墳時代後半頃の整穴住居跡、古代の火葬墓、古代頃の掘立柱建物跡、土坑などを検出した。火葬墓は把手付きの蓋と高台付き杯身がセットで埋葬されており、蓋の中には焼骨が残っていた。また、掘立柱建物跡は2間×2間の規模を持ち、さらに東西方向に椽持ち柱を据えたような柱穴が存在する。</p>

財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書 第41集

**中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告(18)**

片野中山第9～12号古墳・右谷遺跡

発行日 平成24(2012)年3月5日

編集 財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室

〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号

TEL (082) 295-5751 FAX (082) 291-3951

発行 財団法人広島県教育事業団

印刷所 鯉城印刷 株式会社